始

21191

日本禪門偉傑傳

大正
13. 6. 6
内交

325-378 ち

序

若し、活眼を開きて宇宙の本原を徹見せば、一微塵裡に大經卷あり、雨竹風松皆禪を說く、一毫頭上に如來の示現を知らば、何ぞ聯芳續燈の間、漫りに偉傑を傳するの要あらんや。而も什麼なりと雖も、釋尊、靈山會上の拈華は單り迦葉をして微笑せしめ、達磨、東土に來りて五葉開く所、僅に一人の慧可を得たるのみ。

聖諦廓然たるも塵世の客を厭ふなく、十字街頭に瞎睡するも空劫那畔に知音を絕す、是れ蓋し禪門獨特の活作略にして、大悟見性の前には眞俗苦樂の幻相なし、茶裡飯

裡に眞妄を辨じ、擧手投足に權實を斷じて、初めて「當相卽道卽事而眞」の大人と稱するを得べし。現時、說禪の宗師あるも多くは諸法の轉變に著し、偶ま求道の士なきにあらざるも其態度極めて輕佻浮薄、亂起亂滅の世相と戲論。邦家の萬全を希ふもの何人か眞箇那人の出現を望まざるものあらんや。

本書、輯むる所僅かに三十有餘名に過ぎずと雖も、皆是れ日本文化の精髓となり、根幹となりし斯道の偉傑、熱烈なる信念一度び發する所、或は靈智の本原を徹證し、哲學の深遠を極め、或は藝術の神髓に觸れ、政道の要諦を獲得し、赫灼たる光明隨時隨所に顯現して、悉く「上求菩提下化衆生」の本願ならざる莫し。

本證妙修の端的、凡聖一如の消息、書して至らず、幸に明眼の士ありて眼光紙背に徹するあらば、千百の寐語敢て徒爾とせんや。看よ看よ、山高く、水長し。

大正拾參年四月八日、日比谷公園の釋尊花祭より歸りて、
修養世界社樓上、窓外萬朶の櫻を望みつゝ

菅原洞禪識

例言三則

一、本書は斷片ながら過去五ヶ年に亘りて苦心苽輯せるもの、我國禪の渡來より明治維新に至る、禪門の偉傑僧俗五十餘名を輯錄し、將に世に出でんとする矢先、昨年九月一日の震火に見舞はれ、出版所印刷所共に烏有に歸し、爲めに遷延今日に及べり。想起す、カーライルは半生の心血を注ぎて成れる佛蘭西革命史と一友人の不注意より燃燒せられ、更に猛然たる勇氣を以て、より以上の稿を脱するに至りしと、而も予は再び筆を新にする勇氣なく、呆然半歲を空過せり。

一、幸に、道回高島米峰氏の道情に依り、出版の運に至りたるも、原稿概ね散逸又は一部燒失の爲め、初期の目的を完成する能はず、漸く三十六名を選錄するに止めたりし事、隨つて禪門の偉人として當然編入せねばならぬ黄檗の三祖（隱、木、即）及白隱、卍山、鐵眼其他を逸せるは深く慚愧に堪へず、折を見て必ず增補せん。

一、本書の文中、或は評傳に傾けるあり、或は奇行逸話に重きを置きたるあり、長短文飾必ずしも一ならず、これ蓋し其目的研究に非ずして、修道向上の一助にあり。されば讀者は其何物かに依りてヒントを得るあらば、著者の滿足とする所、辭文に推敲を缺き、不備の點多し、讀者請ふ諒恕せられよ。

著者再識

目次

北條時賴の參禪辨道……一

一、鎌倉時代の文化の始祖　二、道の信念の根基　三、時賴と道隆禪師　四、時賴と兀菴禪師　五、豁然大悟と臨終の消息

日本禪門の始祖榮西禪師……一三

一、絶倫の活力と衝天の意義　二、造營事業と茶の將來　三、達磨宗停止の命令　四、鎌倉禪の根基成る

道元禪師の發心及其宗風……二二

一、無常を觀じて遂に發心　二、支那に於ける苦修辨道　三、如淨禪師の大法相續　四、禪師の高風逸格

鎌倉禪の恩人兀菴和尚……三三

一、才子にして辯舌縱橫　二、菴室中に兀々端坐　三、時賴公開悟徹證の師

練膽の秘訣を得たる北條時宗……二九
一、英傑時宗の幼時　二、時宗と道隆禪師　三、時宗と祖元禪師　四、怯懦に對する修養　五、時宗と大休禪師

鎌倉圓覺寺開山佛光國師……五一
一、幼より出家求道の志あり　二、一の公案に七ヶ年　三、國師號を送られたる高僧

聖一國師辯圓の生涯（京都東福寺開山）……五六
一、天台より禪門に入る　二、徑山に登りて無準禪師を謁す　三、三上皇師事せらる　四、各宗の宗匠及儒者其門に入る

御嵯峨天皇の御子佛國國師……六四
一、聖一國師の門に入る　二、遠く人煙を避けて那須山へ　三、端坐修行二十六年　四、國師の臨終と其門下

修行時代の夢想國師……七一
一、心窮かに教外別傳を慕ふ　二、一寧一山及び顯日を訪ふ　三、悟後の修行より鎌倉召喚まで

南北朝の和睦を圖りし偉僧……七八
一、禪林の花一時に燎亂　二、召されて官寺に住す　三、天皇勅して國師號を賜ふ　四、先皇追福の爲め天龍寺を創す　五、足利尊氏を濟度す　六、其發願文は天下の珍寶　七、七朝の國師と稱せらるゝ其勢力　八、南北兩朝の和睦を圖る　九、國師の法嗣に就て

足利尊氏の參禪に就て……九三
一、夢想國師の爲めに之を惜む　二、解決し得ざる問題　三、尊氏の邪智宗教を利用せしか　四、孰れが正孰れが邪

楠正成の信仰に就て……一〇二
一、當時の情勢と公の見地　二、その信仰の一端　三、公の參禪說に就て　四、淡川決死の前日

大智禪師と菊池武時……一一三
一、邪神を射る　二、楠公櫻井の訣別に一如す　三、誠忠の丹心と參禪の妙趣

大德寺開山大燈國師……一一五

一、天台より禪門へ　二、辛辣なる大應國師の提撕　三、悟後の修行と聖體長養　四、終に大德寺を建立す

妙心寺開山關山國師……一二四

一、鎌倉より大德寺へ　二、眞に是れ雲門の再來　三、細氏の奴僕より離宮へ　四、貧富苦樂を超越す

剛健無二の大光國師……一三三

一、下野國より筑前へ　二、大事を究明するに至る　三、花園天皇及後醍醐天皇の恩顧を蒙る

總持寺開山常濟大師……一三六

一、六歲にして求道の志あり　二、喫茶喫飯裡の活佛歟　三、日日是好日底の消息　四、眞實の佛法如何

活埋竅を掘つた通幻禪師を……一四六

一、非凡なる其生涯　二、道の爲めに身命を賭す　三、沙を淘り金を揀ぶ

通幻下の偉僧石屋和尚……一五一

一、通幻禪師の十哲　二、華胄の出にして此意氣あり　三、爲法不爲身の決心　四、玉龍山禪昌寺を開く

藤原藤房の發心……一五五

一、授翁和尚の前半生　二、大燈國師の門に入る　三、關山門下の唯一人　四、八十五歲の入滅

一休和尚の眞價……一五九

一、非凡の天才非凡の修養　二、華叟和尚が辛辣の手段　三、奇言奇行の慈悲落草　四、悟後の遊戲三昧

乾坤第一人の畫僧雪舟……一六六

一、其生誕と別號　二、幼時師を驚かせたる天才　三、天童山の第一座　四、八十七歲遷化まで

伊達政宗と法身禪師……一七四

一、波瀾に富める其生涯　二、政宗と法身禪師　三、晩年の自適

石水和尚に訓練されし伊達安藝……一八一

一、伊達安藝の赤心　二、安藝と石水和尚　三、無二亦無三の境　四、仙臺萩の裏面

上杉謙信の心境練磨……一八六

一、その信仰と人格　二、謙信の參禪　三、その軍機と禪機に就て　四、生死を脱却す

江戸時代の始祖愚堂和尚……一九四

一、關山國師の三百遠忌　二、竹藪中の端坐瞑想　三、玉座に侍して說法

至道無難禪師の發心……一九九

一、本來無一物の公案に三十年　二、此人にして此大酒は何故ぞ　三、禪河山東北寺を辭す

妙心寺再興の祖日峰和尚……二〇五

一、深山幽谷に入りて修養　二、四十三歲にして無因禪師の門に入る　三、後土御門天皇其偉德を賞せらる

修養四十年の正受老人……二〇九

一、十三歲にして大疑問を起す　二、至道無難の法嗣となる　三、懇切を極めたる其法語

山內一豐の修禪……二一四

一、山內容堂の祖　二、山內一豐の禪的決斷　三、變に處して亂れざる信念

無念無想に徹せる宮本武藏……二二〇

一、不二齋の兵法何れにありや　二、武藏の參禪と其の應用　三、坐禪と社會生活

澤庵禪師の敎化に就て……二二八

一、萬松山東海寺の開創　二、民衆敎化の本務　三、大名へ對する訓誡　四、平凡の眞理と其養生訓　五、將軍家光との關係

水戸義公と東皐心越禪師……二四〇

一、感奮激勵の動機　二、其時代の趨勢　三、月坡道印禪師　四、參禪學道の師たる心

仙崖和尚の遺墨展覽會を觀て……二五一
一、神韻酒脫の風格　二、寸鐵殺人底の一句　三、遊戯へ通ふ門下の雲水　四、民衆的の氣分
詩歌翰墨より見たる良寛禪師……二六一
一、示寂時八十八年目の法要　二、禪師の百世に傳ふべきもの三あり　三、實に是れ天下の珍寶　四、この信念との邂逅
井伊直弼の信仰……二七一
一、幕末の混亂に處して　二、外國條約最初の犠牲　三、幸運兒か逆境兒か　四、直弼と師虔和尚　五、高峰禪師の六轉語と直弼の道歌　六、日常生活と其信仰

目次（畢）

北條時頼の參禪辨道

一、鎌倉時代の文化の始祖

日本歴史を閲するものは、其文物制度に於て、其武士道の精神練磨に於て、先づ第一に鎌倉時代の文化を看過するを得ぬのである。天下は麻の如く亂れ果てたる源平戰亂の後を承けて、鎌倉に覇府を築き、善政よく禍亂の後始末をする一方には天下の人心をして平定せしめ、北條氏の執權をして約百五十年の久しきに及ばしめたる偉傑は實に北條時頼その人である。

吾人は鎌倉時代の文化を研究するには、是非共北條時頼の眞面目を研究せねばならぬのだ。時頼の政治的公生涯は史上に明白であるが、同時に、それは現はれたる表面であつて、その現はれざる裏面のあることを考へざるを得ぬのである。瞭爛咲き亂れたる百花の美を見ると共に、其根幹を養成せる所の隱れたる力を知る人の少ないのを

吾人は甚だ遺憾に思ふのである。

時頼の生涯は僅かに三十七年、隨つて彼が修養時代は極めて短かゝつた。それにも拘はらず、乾坤一擲の大事業を完成されたに就ては、茲に卓絶せる何ものかゞなくてはならぬ筈である。然り、彼の幼年時代は松下禪尼と云ふ古今の賢婦人が彼の嫩草を養つた。而して青年時代からは志を禪門に傾け、只管に向上修養の大事を念とした彼の師事せる道隆、道元、兀菴等の禪僧はいづれも古今に傑出せる名僧知識である。彼はその痛棒下に參じて或時は生死の難關を透過せんと努力し、又或時は爲政上の機略を養つた。

豪放なる政治的手腕、細心忠實なる其慈悲心はこれ卽ち時頼自身の體得せる信念の發露ならざるはなかつた。只惜むらくは彼の生命に、もう十年の歳月を與へ得ざりしことである。併しそれは云うても詮のないことであつて、吾人は今茲に彼の信仰を助長せしめたる大德に就て筆を進めたいと思ふ。

二、道の信念の根基

鎌倉時代の佛敎は、實に日本佛敎史上の一轉機と謂つて差支ない。平安朝時代に發達せる天台、眞言等は漸く爛熟の境に達して、兎もすれば煩瑣な儀禮と形式の爲めに一般民衆には其勢力を失ひ、宗敎としての眞生命を疑はるゝに至つたのである。茲に於て乎、新思想と新生命を有する佛敎家の現出するのは蓋し當然の勢であらねばならぬ。法然上人の淨土宗、親鸞聖人の淨土眞宗、日蓮上人の日蓮宗等がそれである。これ等は日本內地に起つたのであるが、これと前後して支那から禪宗が傳つた。榮西禪師の臨濟宗、道元禪師の曹洞宗等がそれである。一般に平安朝の佛敎の理論的形式的であるに對し鎌倉時代の佛敎は實踐的であるが、特に禪は純粹なる實踐佛敎であつたから、從來の形式的儀禮佛敎に飽き果てた人心は翕然として禪に集り、かくて剛健質朴にして活動的なる鎌倉時代の思潮の根柢となつたのである。

北條時頼は道元、道隆、兀菴、敬念等の諸禪師に參禪して居る。道元禪師は久我家

の出て貞應二年（皇紀一八八三）に入宋して天童山の如淨禪師について悟道明心して安貞元年に歸朝し、初めて宇治の興聖寺を開き後又越前に永平寺を開かれた人であるが、時頼の祖父泰時も嘉禎中使を興聖寺に遣して敎化を乞ふたが權門に阿附することの嫌な道元禪師は「眞に大法が聞きたければ自分から來て聞け」と云つて拒絶されたと云ふことである。寛元四年に時頼が執權となるや、翌寶治元年に使を永平寺に遣して師弟の禮を取つて道元禪師を自邸に請して菩薩の大戒を受けた。道崇と云ふ名は其の時道元禪師からもらつたのである。かくて時頼は其の年の八月から翌年の二月まで道元禪師について參禪した。そして自らも大いに得る所があつたのであらう。越前の六條の土地三千貫を永平寺に寄附しやうとしたが道元禪師から拒絶されたので、更に建長三年から建長寺の創立に着手して道元禪師を此處に招待するつもりであつたが、道元禪師はこれも拒絶されたので、後に道隆禪師（大覺禪師）を開山とした。最も建長寺の落成した建長五年には道元禪師も逝くなつて居たのである。

三、時頼と道隆禪師

道隆禪師は時頼の執權となつた寛元四年に日本へ渡來した宋の人で初めは博多の圓覺寺に居て、間もなく京都に上り、次で鎌倉へ來て禪院に寄寓して居たが、時頼はこれを聞いて粟船（今の大船）の常樂寺（泰時の菩提寺）に住せしめて參問して居たが間もなく建長寺の開山に招じた、然し宋の人と日本人であるから其の間の問話は仲々困難であつたらうと思ふ。然し時頼の禪機は道隆禪師によつて大に鍊れたやうである後に悟空敬念（聖一國師の弟子）が時頼に向ひ、

『太守は建長和尙（道隆）を請して既に證られたと云ふことですが、一體太守は建長（道隆）の禪を何う會得して居られるのですか。』

と質ねたことがある。其の時に時頼は

『當處を離れず常に湛然。』

と答へた。悟空はすかさず、

『何ぞ當處を離れざる。』

と突つ込むだが其の時は時賴も二の句が出ずに默つてしまつたと云ふことである。此の話が眞にこの通りあつたか何うかは解らぬが、とにかく此の時までに時賴が契證して居つたとは恐らく嘘であらう。又道隆禪師が契證を以て時賴に許したとすれば道隆禪師は案外人氣取りの上手な人であつたかも知れない。それに比べると兀菴禪師は頗る嚴格な峻烈な切實な人であつたらしい。兀菴禪師について時賴は一層の面目を磨き出したやうだ。

四、時賴と兀菴禪師

兀菴禪師も宋の人である、後章に委しく述べる考ではあるが、例の忽必烈が元國を建てた年、卽ち我が文應元年に來朝して、道隆の後を繼いで建長寺第二世となつた人であるが、其の初めて上堂した時に建長寺の本尊が地藏菩薩であるのを見て「菩薩の位は俺より低いのだから禮拜する必要はないぞ」と云つて大衆の度膽を拔いたと云ふから大抵その氣鋒の辛辣さが察せられる。時賴がある時、

『弟子（時賴自身を指す）大宋に在りて曾て和尙を禮拜す、今多幸にして再び尊顏を拜す。』

と云つた。無論時賴が入宋などしたことはなく、兀菴禪師になど會つて居る道理がないが、禪宗の問答にはそんなことにはかまはない。すると兀菴は大きな拳頭を振りあげて、

『吾、年老ゆと雖も尙ほ拳頭の硬きものあり。』

と云つた、貴樣位な靑二才が何だ生意氣なことを云ふと張り倒すぞ、と云つた元氣である。然し時賴は重ねて、

『和尙の尊年多少ぞ。』

と問ひ返した、兀菴禪師は

『六十三。』

と答へると、時頼は更に、

『弟子這箇の年を問はず。』

イヤそんな老いぼれの年齢を問ふたのではない。兀菴の兀菴たる大法を問ふたのだと一本參らせた心算である。そこで兀菴禪師は、

『這箇の年を是とする勿れ。』

六十三とは俺の年齢を云つたのではないぞ、勘違ひをするな、と云つたが時頼こゝに至つて解らなくなつたらしい、默つてしまつたので、兀菴たまりかねて二ッ三ッ時頼の頭をなぐりつけた。然し時頼は少しも騷がず、悠然として

『某、和尚の拳を蒙り歡喜無量なり。』

と、とりすまして居た。卽ちこの時の時頼は既に充分禪に對する信念を持つて居たのである。兀菴もその態度に感じてか、そのまゝ許して、

『拳頭を作るを得ざらしめよ。』

と注意した。兀菴禪師の時頼に對する態度と、時頼の兀菴禪師に對する態度は常にこんな有樣で、時頼は一生懸命閑さへあれば兀菴に接した。

五、豁然大悟を臨終の消息

時頼は卒去の前年、卽ち弘長二年（皇紀一九二二、親鸞聖人此の年遷化）に至つて修養全く成つたやうである。その時の消息は十月十六日時頼が建長の禪室を訪ねて、

『弟子、近日坐禪して非斷非常底を見得す。』

と云つた、正にこれは自信ある告白であらう。そして又時頼は喜色滿面の得意があつたてあらう。兀菴禪師は

『參禪は只見性を圖る。若し見性を得れば方に千了百當を得む。』

兀菴禪師機の熟したのを見て最後の一針を與へた。すると時頼は

『和尚その方便を指示せよ。』

と逼つた、實に熱烈な渾身の勇を鼓しての參問であつたらう。兀菴禪師は

『天下二道なく聖人兩心なし、若し聖人の心を識得せば卽ち是れ自己の本源性。』

と指示至つて懇切である。時賴は

『弟子道崇、無心』

と答へた。そこで兀菴禪師は更に示した。

『若し眞箇無心ならば堅に三際を窮め横に十方に遍し、譬へば蠟燭の未だ澆成せざる以前、卽ち是れ本地の風光、本來の面目なり。乃ち澆成するに至りて點熱を成し、雅觀を輝耀し、冥暗を照徹し、人々瞻望す、未後の燭盡き、光極まれば舊に依つて前の如く消息す、佛出世して人を度す事も亦是の如し、未だ出世せざる以前は淨法界もと出沒なし、大悲の願力を以て示現し、出世し成道し上中下の根柢に從つて三乘十二分の敎を演說し、拈華衆に示し、聖凡人天大衆をして明心見性せしめ、末後無餘の涅槃に入る、亦一條の蠟燭の如く二なく別なく、萬古流通し直に今日に至る若し此の性を見すれば直下使ち見なり。』

兀菴の平常としてはチット蛇足を加へ過ぎたやうてあるが、蓋し時賴に對して親切を極めてのことであらう、時賴も大に得る所があつたか、

『森羅萬象山河大地も自己と二なく別なし』

と答へた、兀菴禪師もついて

『青々たる翠竹盡く是れ眞如、鬱々たる黃花般若に非るなし』

と全く時賴の言を肯定されたので、時賴も

『弟子、二十一年旦暮の望み今一時に已に滿足す』

と云つて感極つて數行の涙を流した、こゝに至つて兀菴禪師も時賴に印可を與へて、自分の着て居た法衣を脫いで時賴に與へ、

『公は不易の箇の田地に到る、宜しく能く護持して法をして久しく住せしめよ、親しく法衣を附し以て燈と相連らんことを表す。佛の慧命を續ぎて以て末運を光らし、萬世益々榮えん』

と云つて、ついで

『我無二佛法一字說一　子亦無レ心無二所得一　無說無得無心中　釋迦親見二燃燈佛一』

との法偈を附與した。時賴の參禪はかくの通りであつたが、惜しい哉、時賴は翌弘長三年に長逝してしまつた。卽ち十一月の初め頃から病を得て二十二日に三十七歳を以て長逝したのである。其の臨終も亦彼の面目の躍如たるものがある。彼は看護の人、憂愁の客を尻目にかけて臨終の床をはねのけ、袈裟を着け、繩床に上つて坐禪して虛くぜん虛然として

『業鏡高懸、三十七年、一槌打碎、大道坦然。弘長三年十一月二十二日道崇珍重』

と頌して瞑目した。

實に兀菴禪師の棒下に大悟してより一年を出てずして不歸の客となつたのである。彼に與ふるに更に十年の生命を以つてしたならば、公私尙一層その徹底の面目の目醒ましきを見たであらうに、三十七歳は彼の面目を充分に發揮せしむるにはあまりに短かい生涯であつた。

日本禪門の始祖榮西禪師

一、絕倫の道力と衝天の意氣

榮西禪師は明菴と號し、備中吉備津の人である。永治元年四月二十日、曉の明星の出づる頃降誕せられた。八歳、父に從つて始めて俱舍の頌を學んだ。流石後代に崇拜せらるゝ人だけあつて幼少の時から萬事に聰敏で、どこか群衆に勝れた所がある。十一歳の時郡の安養寺の靜心に師事し、十四歳にして落髮し、叡山の戒壇に登り、只管苦修勵行、十九歳有辨法師に就き台敎を學び、尋いて伯耆の大山に行き基好法師より密乘を學び、其蘊奧を窮め盡した、聽て叡山に還り密灌を顯意法師から受け、在山八年、關を閉して大藏經を細閲した。

當時我國の佛敎界の有樣を見るに、平安朝の初めに於て、傳敎弘法の二大師により

て革新せられた王朝佛敎殊に天法無二を以て理想とした叡山の台宗も、今や殆んど佛陀の福音を宣傳することなく、王室を苦しめ武人を惱まし、然らざるものは空理空文を弄び無益の祈禱をなすのみで既に宗敎としての價値は全く煙滅した。我佛敎界は一大革新を施さねばならぬ機運に遭遇した時代なることは前にも述べし如くである。禪師は早くも此の間の消息を看破し、奮然起つて傳敎大師の圓頓禪戒を復興すべく入宋の壯擧を敢行せんとせられた。時に年僅かに二十一歳、如何に禪師の偉大なる人物であり、佛法革新の念に厚かつたかゞ想像せらるゝてあらう。仁安三年四月筑前博多津より一商船に身を托して、遠く雲遠漂渺たる大海に乘り出した。

禪師の入宋は成尋阿闍梨以來百年。殆んど其の例を見なかつたのである。而も禪師は一度ならず二度までも入宋の上、更に印度迄も渡つて釋尊の靈蹟を膽禮せんとせられた。其絶倫の道力と衝天の意氣とは何人も驚倒せざるを得ぬ。

二、造營事業と茶の將來

禪師は歸朝後、天台眞言の迫害を避けんが爲めに顯密二敎をも弘布せられた。けれども其の本領とする所は禪にあつたのである。禪師の著述なる『興禪護國論』三卷は文甚だ廣漠たる大著述であるけれども、其の主旨とする所は戒を以て初とし、禪を以て究となすべきを說かれて居るに據つても知ることが出來る。そして禪師は當時最も主要の都府であつた京都、鎌倉、博多に建仁、壽福、聖福の三大刹を創立し、其法嗣には行勇、明全、榮朝等幾多の俊傑を出し、我國禪門の基礎を建てられた。是れ實に禪師が我國に於て禪宗の始祖と仰がるゝ所以である。

尙禪師に就いて注意すべきは、禪師が支那から茶種を將來したことである。今日我國一般が日常缺くべからざるものとせられたのは禪師の賜物といはねばならぬ。

禪師は新たに伽藍を建立するとか、或は廢れた寺を興すとかいふやうな造營事業には天才的手腕を有つて居られた。禪師が在宋五ヶ年の間にも色々な造營をやつて居らるゝ、先づ第一に天台山萬年寺の第一世吉祥旦尊者の遺骸を更斂して塔表を修せられ

た。之れは禪師が、自ら吉祥旦尊者の後身であると深く信じて居られたからである。禪師の詠まれた詩に、

海外精藍得々來、　青山迎我笑顏開。
三生未朽梅花骨、　石上尋思掃綠苔。

蓋し是時の作であらう。

其他智者禪師の塔院の頽毀して居るのを歎き衣資を捨てゝ之を修營し、或は萬年寺の三門の兩廡の缺けてゐたのを興造し、或は天童山の千佛層閣の改作に力を盡された そして大衆が皆之れを美德とし、功を勒して石に刻んだことなどが太白名山千佛閣記日本國千光法師祠堂記等に詳らかである。

三、遠唐宗停止の命令

又禪師が在宋中疫病大に流行して天下爲めに之を憂へた。そして孝宗皇帝は高僧數輩に命じて祈らしめたけれども少しも其の效がない。遂に禪師に詔があつて、新念した所が忽ち感應あつて、一日にして疫已に除き二日にして死するもの蘇生するといふ有樣であつた。是に於て帝大に嘉嘆して宣はく「和尙葉上と名づく是れ葉上の釋迦身を現ずるに非ずや」と、そこで特に「千光大法師」の徽號を賜はつたのである。

本朝高僧傳には仁安三年秋孝宗皇帝の勅を奉じて雨を祈り、忽ち感應あつて天大に雨を降らした。其時修法の間禪師の身から光を放つたので、千光法師の號を賜はつたと書いてある。

禪師は建久二年七月歸朝して直に民部大輔淸貫に請ぜられて肥前に禪院を建立し、秋八月八日始めて禪規を行ひ、始めは集まる者僅かに數十輩に過ぎなかつたが、幾許もなくして海衆堂に溢るゝに至つた。此淸貫の創立した寺は何といふ寺であつたか、今日からは殆んど之を明かにすることは困難である。「鏤氷集」に、

「肥前の州高來郡寶月山智慧光寺は千光國師再び宋地に入り歸朝の日此の禪刹を建立し以て包を解く實に日本禪林の根本なり。」

とあるから、或はこの智慧光寺ではなからうかと想像せられる。其後間もなく禪師は筑前那珂郡に妙德寺、同志摩郡に東林寺を創立し、尋いて建久三年には同糟屋郡香椎神宮の傍に建久報恩寺を建てゝ菩薩大戒の布薩を行ひ、又同四年には筑後國山本郡に龍護山千光院を開いて、西海を風靡するに至つた。

建久五年禪師はいよ〳〵京都に入り、諸宗監視の下に禪風を擧揚するに至つた。當時我國にあつては禪宗などいふ宗旨があるがどうかといふことすら知らない有樣であつたから、禪師が如何に熱心に心要を説れても一向耳を傾くるものもない。却つて南都北嶺の大なる迫害を蒙らざるを得なかつた。禪師が鎮西に於て漸次地歩を占むるや筥崎の良辨なるもの深く之を嫉んで、遂に台徒を誘うて朝廷に訴へ、竄逐せしめようとした。茲に於て朝廷に於かれても止むなく、同年七月五日達磨宗停止の趣を宣下せらるゝに至つた。

尋いで六年朝廷藤原兼實に詔して禪師を府裏に召され、主當令大弐仲質をして徵問せしめ、左大辨宗賴をして預り聞かしめられた。

禪師乃ち僞黨を斥け、眞乘を擧唱せられて曰く、

『我禪宗は特に今始めてあるにあらず、昔傳敎大師内證佛法承血脈を作る、其初は卽ち達磨西來の禪法なり。彼の良辨は昏愚無智、台徒を引きて我を誣ゆ。禪宗若し非ならば傳敎も亦非、傳敎非ならば台敎立たず、台敎立たずんば台徒豈に我を拒まんや。』

と恰も敵の刄を奪つて、敵を刺すやうな、此巧妙なる答辯に對しては、世の識者は多く其の非を悔いたであらうが、台徒は尙ほ囂々として止まない。

四、鎌倉禪の根基成る

禪師は法然、親鸞、日蓮等と同じく鎌倉時代の初期に出世し、叡山に登つて台敎を學び、腐敗墮落の極點に達した當時の佛敎に鑑みて、同じく一宗一派の開祖とはなつたけれども、其の間に著しい差異があるやうてある。卽ち禪師は他の諸師のやうに舊

來の信仰を離れて、別途の宗派を開立せんとして起つたものではない。叡山に於ける積年の弊を一掃して、傳敎大師が終生の理想とした圓頓禪戒を復興して、令法久住鎭護國家の祖意を全うせんとせられたに外ならぬ。換言すれば第二の傳敎大師たらんとせられたのである。

次に榮西禪師と鎌倉幕府との關係であるが、正德元年禪師五十九歲にして錫を鎌倉に移された、是れ實に禪宗の鎌倉に起る始である。惟ふに是れは顯密二敎の妨害、激烈なるがため、關西にあつて容易に其の目的の達し難いのを見て、暫く化を東國に布かんとせられたのであらう。

當時鎌倉にあつては、幕府の基礎未だ鞏固ならず、保元平治以降源平の爭亂うち續いた結果として父子相殺し君臣相反き、殆んど秩序なく道義なく百鬼夜行魑魅跳梁といふ有樣であつた。されば此時代に出でゝ一度靜座し、つら〳〵人生の意義に就いて反省するもの、旦に疑問百出、夕に深刻なる宗敎的意識を喚起するであらう。禪師の化を東國に布かれたのは實に斯の如き時代であつたのみならず、禪師は學德優れた名僧であつたから、忽ち一般の歸敬を受けた。殊に將軍源頼家並に政子は深く歸依し其の道風を慕つて、此の年の九月二十六日禪師を請じて不動尊一體を供養した。

正治二年正月十三日には頼家の請に應じて導師となり、法華堂に於て故將軍源頼朝の一周忌追福供養を行はれた。嘗ては達磨宗停止の宣旨すら降つたにも拘らず、今や幕府に請ぜられ、北條氏以下諸國の大名小名星の如く列座して居る面前に於て幾多の衆僧を率ゐ莊嚴なる法式を營まれた禪師の得意想ふべしである。

尋いて閏二月十二日、政子の本願に依りて伽藍建立の議あり、土屋次郎義淸の建議によつて、龜谷の地を指定した。此地はもと下野國守源義朝の屋敷跡で、岡崎義實が嘗て報恩の爲に一梵宇を創建した所である。翌十三日其の地を禪師に寄附し淸淨結界の地と定め、藤原行光三善善信の二人を奉行として、直に造營に取りかゝつた。やがて三門佛殿祖師堂鐘樓等悉く落成し禪師を以て開山第一祖とした。是れ實に龜谷

山金剛壽福寺で後鎌倉五山の第三位に列した名刹である。尙、新史實として下野國佐野莊には禪師開創の寺院四ヶ寺あり、其中永台寺は現今曹洞宗なるも行基菩薩の創立にかゝり、中世荒廢の時禪師を請して再興開山となせる因緣を以て、今尙ほ境內には禪師の分骨を葬れる靈塋がある。

禪師は建保三年六月五日、右の金剛壽福寺に於て寂を示された。時に壽七十五、法臘六十三、荼毘に附されたる舍利は京都に送り興禪護國院に收められた。

道元禪師の發心及其宗風

一、無常を觀じて遂に發心

明治天皇によつて諡せられたる承陽大師、卽ち道元禪師は土御門天皇の正治二年正月二日京都に誕生遊ばされた、父は內大臣右近衞大將東宮大傅贈從一位久我通親公、母は攝政太政大臣從一位藤原基房公の女、大師胎に在すこと十有三ヶ月、生るゝに及び博士之を相して曰く

『七處平滿にして骨相奇秀なり、眼に重瞳ありて至聖の虞舜に齊し、必ず常人に非ず唯恐る父母の天壽を永享せざることを』

と、以て大師の英姿異貌を想見し得ると共に、この高貴なる血液を受けて名門華冑に呱々の聲を揚げたる大師は、不幸にして三歲の十月二十日嚴父通親公の薨去に逢ひ、爾來仲兄大納言通具公に引き取られて鍾愛一方ならず鞠育せられたが、翌建仁三年、乃ち四歲にして唐人李巨山の詩集なる李嶠雜詠を讀み、建永元年七歲にして周詩一篇を賦し、養父通具公に呈して驚かし、又孟子、左傳、春秋等の書を讀んで其義に通曉し、漸次學業は日と共に進み、師訓を待たずして一切文字の義趣を了得し、人をして驚歎せしめた。されば人呼んで文殊丸と云ふたも道理、實に非凡なる神童であつた。

承元々年大師八歲の冬、うき世の風は容赦なく又も大師の上に悲しく吹き荒んだのである。生者必滅會者定離は人生の常相、さるにても三歲にして嚴父を失へる我が大

師は今亦た慈母に先立れた。悲哀溢るゝ小さき胸の中や如何ばかりであつたらう。斯くて高雄寺に執行せる弔祭の席上、翕前に跪きて拈香揖拜、涙に曇る眼に映ぜるは縷縷として立ち上る香の煙の消て滅くなる有様に、世の無常を感じ深く求法の志を起したのであつた。

一度萠え出でし求法の芽は次第に伸びて十三歳の春、愈〳〵出離を決したまひ、一夜更闌に人定まつて後、肅然として乃父乃母の寢室に向ひ、多年慈撫の劬勞を禮謝し花影幽徑を辿りて叡山の麓に至り、母方の叔父に方る良觀法眼の庵を訪ねて出家の覺悟を述べた。良觀驚き思ひ止まらしむべく説諭したが、母が臨終の遺言なればと て堅き志は飜さない。良觀止むなく其志を容れて出家を許した。斯くて大師は其翌建保元年四月九日、天台座主公圓僧正に就きて薙髪し、其膝下に在て專心顯密の二乘を修め、只管辨道に志を傾けられた。

須彌に登るも天のあるあり、況してや佛法の大海は漸く入れば漸く深い、昨は幽玄微妙の御法と喜びし身も、今は深遠渺茫たる疑路に立つた。大師は山門の碩學耆德に歷參質疑したまひしかど、理致の指教を受くる能はず、三井寺の公胤僧正より廻り廻りて當時盛名隱れなき榮西禪師を建仁寺に訪うた。禪師遷化の後はその弟子明全和尚に就いて教を受け、貞應二年彌生の春明全和尚と共に蹴然として遠く入宋の鹿島立、同じく三月下旬博多を出帆せられた。

二、支那に於ける苦修辨道

一度入宋を企てたる道元禪師は、海上無事、支那明州に到着した。明州に着いて暫らく船に止つてゐる中、一人の老僧が育王山から訪ねて來た。老僧は日本の椎茸を買ひに來たのである。仕合よしと禪師は老僧を捉へて、茶を出して色々と寺の樣子を聞きなどした。老僧は語り出した。

『私は西蜀（今の四川）の產れ、今年は六十一歳ですが、鄕里を離れてから既に四十年になります、その間到る所の寺々を歷訪し、今は育王山に止まつて典座（寺の賄

掛りのこと）の役を勤めてゐます、汁を作りたいと思つたが實がないので、椎茸を求めに參つたのです』

禪師は好奇の眼を眸つて、

『育王山は、これから幾何程ありますか』

『三十四五里』

『貴僧は何時お歸りになります？』

『椎茸を買へば直ぐ歸山ります』

『それは餘りにお名殘惜い。暫らく船にゐて色々お話を承はり度いが、爾う願はれますまいか』

老僧は頭を振つて『それはいけません、明日は諸方から來る雲水を供養せねばなりませんから』

『併し、齋の粥を作つて雲水を供養するものは、貴僧の外にいくらも御座いませう、そんなにお急ぎにならぬでもよいではありませぬか』

『イエ、此の年で此の仕事をやるのは、老耄の者の辨道です。外に讓る譯には行きません』

『貴僧の齡で、そんな蒼蠅い仕事をなさずとも、坐禪して古人の公案でもお考へになる方が可いではありませんか、瑣々たる厨房の事務が何になりませう？』

と、道元禪師は不審の眉を寄せた。すると老僧は莞爾と笑つて云つた。

『外國の好人！　卿はまだ辨道を知らない、文字を御存知ない』

之を聞いて禪師は忽然として恥ぢ入り、心中大に驚き且つ尋ねた。

『文字を知らぬとは何う云ふことです、又辨道とは何の事で御座います？』

『それが分りたければ育王山へ來て、一番文字の道理を考へさつしやれ、もう時がない、愚僧は歸山ります』と愴徨として老僧は立ち去つた。

禪師は此の問答によつて偉大なる刺戟を受けた。その年の七月初めて、天童山に上

つて、無際和尚について學んだ。天童山は浙江省慶元にあり、寺の名を景德寺といふ。宋朝の五山の一つで、渥く朝廷の保護を受けて資財太だ豐かに、集り來る宗徒は常に千人を下らなかつたと云ふ。明全和尚もまた禪師と共に此の寺に留まつたが、これは師匠の榮西禪師が此處にゐた緣故によることゝ思はれる。

二年ばかり居る間に、禪師は數回の印可を得た、それで卒業はした筈なのであるが禪師自らは滿足しなかつた。で、諸方を遍歷して徑山に到り、如淡禪師について學んだが心中面白くない、更に台州に往つて思卓禪師についたが、此處でもまた餘り見込がないので、彼方此方と歷訪して見た。けれども師として事ふべき技倆のあるものが見附からぬ。已むなく再び天童に歸つて無際和尚に從はうとしたが、途中で無際が示寂したことを聞き大に悲歎して『もう支那にゐても望みがない』と、歸朝の念が油然として胸に湧いた。

そこで明全和尚に告別する積りで天童山に向つたが、途中で一人の老僧に逢つた。その老僧の言ふ所に依ると、近頃天童には如淨禪師が勅請に應じて住してゐる、この人は近代稀なる大宗匠である『早く往つて參見されては如何』と云はれ、禪師は道を急いで登山し、如淨禪師に見えた。

三、如淨禪師の大法相續

如淨禪師は始めて禪師を見て大に喜び『問法は晝でも夜でも、如何なる時、如何なる處でも、また着衣などの如何に拘はらず、自由に來つて道を問はれよ。老僧は父が子の無禮を許すが如くに卿を許す』と云つて、非常に親密の態度を以て之を遇した。

禪師は茲に始めて自己の師事すべき人を得て、寒暑を忘れ、寢食を廢して佛道を研究した結果、功業は日に精しく月に進んで遂に大悟を開き、如淨禪師の印可を得るに至つた。併し不幸にも此の間に明全和尚が[illegible]を得て、百方手を盡したけれどもその甲斐なく遂に示寂した。依て茶毘してその舍利を納め、歸朝の日に之を携へて船に上り、建仁寺の榮西禪師の廟側に葬つた。

如淨禪師についてから三年、支那の寶慶三年日本の安貞元年秋の頃愈々歸朝せんとし、如淨禪師にお暇乞をすると、如淨はその祖師より傳へたる袈裟、自贊の畫像及び訓戒書を授け、さて誡めて云ふには、『國に歸つて化を布き弘く人天を利せよ、城邑聚落に住むこと勿れ、國王大臣に近づくこと勿れ、深山幽谷に居つて一箇半箇を說得し我宗をして斷絕を致さしむること勿れ。』

禪師は謹んで旨を傾し、船に上つて黃海を渡り、無事日本に歸朝することゝなつた斯くて禪師は支那天童山に在りて苦修辨道、淨祖に佛祖嫡傳の正法眼藏を相續し、第五十一代の祖位に列せられ、彼地を辭して無事歸朝せられたのは安貞二年、禪師二十九歲の御時であつた。

禪師歸朝の後「我天童淨祖に參見して眼橫鼻直なることを認得して空手にして鄉に還る」と宣言せられたが、參問の道俗は輻湊した。此間に「普勸坐禪儀」及「辨道話」を選述せられて之をお示になつたのである。天福元年に深草の安養院より觀音導利興聖寶林寺に入り、翌文曆元年上足たる孤雲懷奘禪師參問せられ、嘉禎二年秋諸堂完備したるを以て祝國開堂せられたのである。此時特に四條天皇より興聖寶林寺の勅額を賜うた。

斯くして此寺にありて道俗を接化せらるゝこと實に十有一年、寬元元年七月、京都を出て、波多野義重の請待により越前に赴かれた、同二年伽藍落成して大佛寺と稱し同四年に吉祥山永平寺と改めたのである。

四、禪師の高風逸格

而して先師天童如淨禪師の遺囑により、永平寺に在りて一箇半箇の說得を事として繁華の都市に出づるを好ませられなかつた。寶治元年七月、北條時賴禪師の高德を仰慕し懇請止むなく、同九月永平寺を出でゝ一衣一鉢鎌倉に着し、約半ケ年間留まつて再び越前に歸られた。然るに建長二年後嵯峨上皇深く禪師の操行を歎賞せられ、紫衣を賜うたが固辭して御受けにならなかつた。併し上皇の命默し難く、之を受けたが終

生身にはお着けにならなかつた。此一事にても禪師の高風越格誠に眞の佛祖たるべき大人格者であつたことが知り得るではないか。禪師紫衣辭退の時の偈に、（編者曰、左の偈には異說を唱ふる人古來多し）

『永平谷淺しと雖も、勅命の重きこと重々、却つて猿鶴に笑はれん、紫衣の一老翁』

以て其精神を窺ふことが出來るのである。斯くして道俗を接待し化導せられしが、禪師の御本懷は弘く大法を擧揚すると云ふよりも深く之を後世に垂範するの源を培はんと云ふ所にあつた。されば大師は一方に弘敎宣揚と共に一面には人物養成にお心を注がれた。されば其法嗣の徒もあまり多くはないが孤雲懷裝、永興詮慧等の人傑を出すことが出來た。これ實に日本曹洞宗傳來の初めである。

建長五年、大師四大不調、示寂の時機近づき來れるを知り、七月十四日永平寺を孤雲禪師に讓り、八月五日病を養はんがため洛陽に出で西洞院に入り、化緣茲に盡き、八月二十八日を以て滅を示された。時に御齡五十四歲。遺偈に曰く。

『五十四年、第一天を照らす、箇の跳跳を打して大千を觸破す。咦。渾身覓むるなく活ながら黃泉に陷る』

と、此の一箇半箇の接得を宗風とせる禪師の法流は、月を重ね年を經るに從つて、漸次に盛大となり、約七百年後の今日、寺院の數一萬四千、檀信徒一百七十萬と稱せらるゝ我國唯一の曹洞宗を現成するに至つたのである。

鎌倉禪の恩人兀菴和尙

一、才子にして辯舌縱橫

我國に禪宗が盛んに弘まりしは北條時賴並に北條時宗二人の力である。而して其の北條時賴、時宗の二人をして禪宗の信者たらしめたる指導者は何人ぞ、此の二人をして禪宗の信者たらしめたる者は前章に述べし如く、兀菴禪師と更に佛光國師との二人である。卽ち北條時賴公は兀菴禪師に依つて得道し、北條時宗公は佛光國師に依つて

徹證した人である。故に兀菴禪師と佛光國師とは鎌倉時代の禪宗史として見遁すべからざる偉人である。

而して此の兩人修行の履歷を尋ねるに、何れも苦修研鑽非凡の修行により漸く悟つた人である。兀菴和尚の傳を閲するに、和尚は西蜀とて昔孔明の出た處、卽ち西方支那の國境に方る處に生れた人である。幼年の時に出家し色々の學問を勉强せられしが後に禪宗を慕ひ、禪宗を學ばんがため故郷を出て、東南の方面に向つて名師を求め、遂に阿育王山に登り無準禪師といへる人、卽ち當時にあつて最も名高い禪師に參じ悟りの道に入つた。

兀菴は生れながらにして非常な才子であつた。而も辯舌に於て他に當るものなきほどの人であつた。初めて無準禪師の所に參じ一場の話を聞いて、卽座に夢の覺めた如く豁然として悟る所あり、其れより後は愈々以て辯舌無礙の人となられた。處が一日無準禪師語つていへるやう、

『往時法演禪師といふ御方があつた……此の人が嘗て守端和尚の所に往つたところが守端和尚語つて曰く近時一青年の禪客あつて盧山より來た、我れ彼れに禪學のことを說かしむれば仲々よく之を說く。他の禪を批評せしむれば又非常によく之を批評す。更に自らの所悟を語らしむれば又同じくよく之を語る。少しも落度がなかつたと。法演禪師之を聞き和尚如何と問ふた、卽ち和尚は其の人に對し何んと想はれしやと、せめかけたのである。時に守端和尚の曰く我れ其のとき「直下未在」と言へりと申された。蓋し未だ足らずと直に彼れを呵責して追い返へしたりといふ意である、法演禪師は其の後七日間食を忘れ唯この「直下未在」といへる所にのみ心を留めて工夫し、漸く其の旨を得られたりとの事である』

と語り畢つた。蓋し是れ無準禪師が兀菴に對しての昔話しである。此の昔話を爲せるは他にあらず、兀菴が既に自ら得意顏になつて多言なりしを誡めんが爲めである。

二、菴室中に兀々端坐

兀菴はこの話を聞いて何共返へす辭はなかつた。唯深切な教訓であると聞取り、深く自己を省察した、尙ほ未だ足らずと呵責せられしところに深く注意し、爾來口を緘し默然として唯坐禪するのみであつたが、遂に一日眞に悟る所あつて無準禪師の室に入り之を告ぐるに、無準禪師これを賞め、且つ誡めて言へるやう、

『道を得ることは易く、道を守ることは難し。須く默して之を守ることを勉めよ、久しき歲月を經る間には自然に感驗あるべし』

と是より後は靜なる菴室にあつて、毎日唯獨り兀々として坐禪するのみ。是れ卽ち眞の精神の修養である。卽ち「道を得ることは易く道を守ることは難し」であつて、道理を合點し理窟の分かるまでに至ることはさほど六ヶ敷ものでない、其の知つた理窟通りの人となることが至つて六ヶ敷のであつて身心一如、己が聞いたり、又考へたりした道理と少も違はぬ人となることは眞に容易でないのだ。繪をかくのも書をかくのも運筆の法を知り着色の仕方を辨へることはさほど六ヶ敷ことでもないが、法の如くに繪がかけるやうになり、又書がかけるやうになることに眞に容易な事ではないのである。

精神の修養は尙ほ更のことである。精神の修養と云ふ中にも禪宗の坐禪ほど適切なものはあるまい。もし佛教家の語を應用すれば謂ゆる自力修行といふのであるが、自力でも他力でも吾人の精神を修養して、教の如く又道理の如く、或は又我が思ふ通りのものたらしむることは、眞に不容易である。今兀菴禪師が、兀々として毎日菴室の中に唯獨り坐禪して居たといふのは卽ちこの精神修養をして居たのである、一見痴の如く、啞の如き狀態であつたに相違ない。

三、時賴公開悟徹證の師

時に無準禪師これを見て大に感心し後に兀菴といへる二大字を書いて與へられた。蓋し是れ其の行狀を賞められたのであるが、それより後は竟にこの兀菴を以て呼び號とすることになつたので、本名は普寧といふ人である。時に普寧禪師が初め蜀の國を

出て南遊し、無準禪師の所に於て修行に修業を重ね、終に兀菴の號を受くるに至り、而も其の名聲四方に聞ゆることゝなるまでに、幾許の歳月を費して此に至りしものなるや、傳に之を明記せざれば其の詳細を知ることが出來ぬ。

兀菴は宋末の亂を避けんが爲め、日本に來遊した人である。而して東福寺の聖一國師は嘗て入宋せし時の舊友にして而も同窓の間である。故にまづ京都東福寺に安着せしところ、北條時賴既に之を知り、建長寺に迎へて優遇し、自ら軍務の餘暇弟子の禮を執つて參禪し、數番の問答商量があつた。而して遂に契悟徹證するところに至つたのである。

時賴公は道元禪師よりも聖一國師よりも又建長寺開山道隆和尚よりも禪法を承けた人であるが、契悟徹證とて一般宗敎にあつて之をいはゞ信心獲得とも謂ふべき禪宗の悟はこの兀菴禪師に依つて得られたことは既に述べた。故に兀菴は誠に大切な人たるにも係はらず、時賴歿後揣らずも建長寺内に道隆黨と兀菴黨と相分れた。これがため人の留むるをも聽かずして遂に歸國の途に就いたのは惜むべき事であつた。

練膽の祕訣を得たる北條時宗

一、英傑時宗の幼時

「相模太郎膽如ゝ甕」と驚嘆したのは獨り賴山陽のみではあるまい、先年吾人が日本海に露艦を全滅せしめたる東郷大將の偉績を驚嘆せる如く、或はそれ以上に當時の人は驚嘆したであらう、而して忽必烈も元の民も其の大敗と時宗の剛膽に啞然たるものがあつたらう。否、當に當時の内外人のみではない、天下後世の日本史を知る者をして永く嘆賞を惜まざらしむる處である。

時宗の父時賴の卒去した時彼はまだ十五歳の少年であつた。其の後長時、政時を經て彼が執權職を繼いだのは十七歳であつた、文永五年忽必烈が始めてかの無禮なる國書を寄せた時に彼は二十歳であつた。彼は現今であつたなら實に中學敎育を終つて間

もない適齡前の青年である。文永十一年に元軍の入寇した時彼は二十六歳であつた。弘安四年に徹底的大敗を與へて元軍の日本侵入をして全く絶望せしめたのは彼の三十三歳の時であつた。卽ち彼は二十歳より三十三歳迄の十四年間「如何にして元軍に備ふべきか」「如何にして國運を維持すべきか」の全國民の深憂を一身に負ふて心膽を碎いたのである。世には弘安の役の大捷を以て單に一の僥倖に歸せんとするものもあるし舉國の心血を以て國難に當らしめたるが爲めなりと云ひたい。無論上は、聖帝より下は萬民に至る皇天皇土一統の力が外敵を粉碎したのであるが、もし執權たる時宗に國信使禮部侍郎杜世忠等一行の頸を龍ノ口の刑場で刎ねて防備より寧ろ攻勢に轉ぜんとした大度、弘安二年に茫文虎部下周福等が再三再四の牒狀を齎した時、時宗自ら諸々の經文を血書して敵國降伏を祈つた熱誠が無つたら、其の結果は或は寒心すべきものがなかつたとも保し難いのである。

時宗は誠に一世の雄傑であつた、然し世に生れ乍らの聖人、生れ乍らの英傑はない。固より聖賢にせよ英傑にせよ、その天資既に凡庸と伍せざるものあるべきは論なきもその素質を培養發達せしめて眞の聖賢英傑たらしむるは後天的の修養である、時宗の父は道元、道隆、兀菴等の諸禪師に參じ、徹底明心の域に發した時賴である。その時宗の幼少時代に父より受けたる薫陶は察するに難くないのである、更に長ずるに及んでは兀菴、道隆、大休、祖元等の禪師について參禪して居る、時宗の此の如き剛膽を時代を洞察する明敏なる眼睛と、人心を機敏に捉へる政治的手腕の依つて來る所又略窺ひ知り得るのである。

二、時宗と道隆禪師

兀菴は建長二世として時賴に接したが、時賴が卒去するや自分の語錄の木版を燒き捨てゝ支那へ歸つて了つた。道隆は初め兀菴に建長寺を讓つてから京都に出て建仁寺に居つたが名利と權勢本位の當時の虛榮佛敎に壓迫される煩を避けて間もなく信州の

山中に隱れた、後又建仁寺に歸つて奮鬪して居たが、其の後又鎌倉に來て最明寺（時頼の菩提寺に入り禪興寺と改號して、こゝで時宗の歸依を受けて居つた。其の後も他宗の壓迫が辛いので道隆は屢々鎌倉を去つたことがあるが、時宗は常にこれを鎌倉へ召し歸し、遂に再び建長寺の住持にして參禪して居つた。其の頃時宗は父時頼が建長寺を創立したるに習つて、自分も一宇を建立しやうとして道隆の指示に依つて計畫を進めたが、其の計畫を實行せぬうちに、道隆は弘安元年に入寂してしまつた。

道隆禪師を失つた時宗は非常に失望したが、それと共に何うかして宋土から自分の參ずるに足るべき名僧を招待しやうと決心して、弘安元年の十二月詮藏主と英典座の二人を使として入宋さした、蓋しこれには名僧を招すると共に私かに宋及蒙古の情勢を探らせやうとした政治的の意味があつたのであらうと想像しても無理ではあるまいと思ふ。ともかく二僧は翌弘安二年の五月に支那へ着した。而して明州天童山の第一座祖元和尚を迎へて八月に鎌倉へ歸つて來た。支那では此の年の始めに宋は既に蒙古の爲めに滅されて了つて、國内紛亂して大山名利もその難を蒙るもの少くなかつた。そこで此の前後には祖元以來に名僧知識が仲々多く日本へ來て居る。尤も日本へ難を避けたのは僧侶ばかりでなく俗人も多く來て居るが、祖元が早速承諾して渡來したのも一は時宗の熱心なる招待に感じ、一は蠻狄蒙古を惡むで其の毒鋒を避けて來朝されたと見てよからうと思ふ。時宗は祖元禪師を迎へて非常に喜んで早速建長寺の住持として參禪の師としたのである。この時、時宗が詮、英の二僧に托した老衲招請の狀は左の通りである。

時宗、留意宗乘、積有年序、建營梵苑、安止緇流、但時宗每憶樹有其根、水有其源、是以欲請宋朝名勝助行此道、煩詮英二兄、莫憚鯨波險阻、誘引俊傑、歸來本國、爲望而已。

弘安元年戊寅十二月二十三日

詮藏主禪師

英典座禪師

三、時宗と祖元禪師

祖元は卽ち佛光禪師であるが非常な卓越せる大善知識であつた。蒙古軍が侵入して宋朝を滅した時は明州天童山の第一座であつたが、所在を荒し廻つた賊軍は天童山へも亂入して來た、祖元はその時、僧堂で平然として坐禪して居つたが、賊軍は禪師を捉へて白刃を揮つて其の首に擬したが、禪師は神色自若として

乾坤無地卓孤筇、　且喜人空法亦空、
珍重大元三尺劍、　電光影裏斬春風、

と偈を唱へて從容として居つたので、流石に亂逆な元兵も感佩して其の無禮を謝して逃げ去つたと云ふことである。禪師の面目は實に此の間に躍如たるものがあるが、尙其の病床に臥して居る所へ一日時宗は侍醫を遣はして灸治を努め、突然醫師に託して

法門の失を放たせて「和尙は今日灸治されたが一體これは法身を灸せられるのか色身を灸せられるのか、若し色身を灸するとならば、色身は元來法身を離れて存在するものでなく、もし法身を灸すとなら、法身に病は無いなどゝは云へぬではありませんか」と突擊さしたが、禪師は直ちに偈を作つて

一燋通身烈焰紅、　塵毛刹土煖烘々、
老僧忍痛無他意、　只要衆生病掃空、

と示されたさうである。

四、怯懦に對する修養

次に時宗が祖元禪師を師としての參禪振りを一二書かう、時宗はあれ程の英傑であつたが、生來何うも怯懦であつたらしい、彼の自筆によれば彼は常に自分の怯懦を憂へ又その小膽なるに苦んで居たやうである、時宗が尋常の人以下に怯懦て小膽であつたか何うかは知らぬが、若年を以て天下を振ひ國難を負はねばならなかつた彼が一層

痛切に勇猛明敏にして剛毅なる膽力の試錬を感じたのは當然である。卽ち彼は祖元禪師に參じて

『人生の憂苦怯弱を以て最となす、如何にして怯弱を脫すべきか』

と問へるに對して、禪師は

『脫すること甚だ易し、正に怯弱の來處を閉づ可し』

そんなことは譯はない、怯弱を脫するには怯弱の依つて來る處を閉いてしまへと云ふのである、そこで時宗は更に

『怯弱何れより來る』

と反問して居る、これに對して禪師は

『時宗より來る、試みに明日より時宗を棄捨し來れ』

と訓示されてある、卽ち怯弱の源は時宗にある、お前の身心をスッカリ離れて見よ怯弱などは立どころに無くなると云ふのである。これは殆ど祖元禪師が時宗に對する

始終一貫の態度で、固より佛敎と云つてもこれ以外に一句も出るものではないが、又ある時、時宗は一の公案に就いて五六日も工夫に工夫を重ねて遂に解決するを得ず、止むなく使僧を遣して祖元に

『如何にしてか雜念を截斷すべき』

と問はしめた、卽ち工夫を凝らさんとすればする程雜念妄想が紛起して困るが、如何にしてこれを截ち斷つたらよいかと云ふのである、禪師はこれに問へて

『凡そ外科を假借し、物を以て物を遣れば、一重を去得すと雖も又一重を添へん、萬事紛然たるの時は公案を以て念頭に換得すと雖も妙明圓滿淸淨靈覺の體、千日英照するが如くなるもの、竟に此の樣の話頭に障却せられて、見ること能はず、只管別に悟入せんことを求む、譬へば楚を欺いて吳に投ずるが如し』

と垂示されたと云ふことである。これもやはり「時宗を捨棄し來れ」の意である、思想を以て思想を拂はうとすれば邪念が續いて起つて際限がない、紛然たる妄想を拂つ

て公案に歸せんとするもそれでは公案も一の妄想になつてしまふ、一切を排却してしまへば其處に公案そのものが現れて、卽ち清淨圓滿なる靈覺の本體が赫然として輝くと云ふのである。又禪師は時宗に五條を示して日々の心要を與へられてある。

一、外界の庶事に心意を奪はるゝ勿れ。

二、外界の庶事物に貪著すること勿れ。

三、念を止んとする勿れ、念を止めざる勿れ、只一念不念を努めよ。

四、心量を擴大すべし。

五、勇勢を保持すべし。

時宗の祖元禪師についての修養振りはこれ等によりて想見することが出來る、而して又祖元禪師も時宗の意のある所を察し、飽くまで指導して外敵掃蕩の事業を完からしめんと心を碎かれたやうである。弘安四年の夏元寇十萬の兵が殺到せんとする時、時宗が祖元を訪れた、禪師は矢庭に筆を執つて、

『煩惱する莫れ』

と書き示された、時宗はあまり突然の垂示であつたので其の意をはかり兼ねて

『煩惱する莫れとは何の謂ぞ』

と質した、すると禪師は

『春夏の間、博多搔騷せん、而して一風纔に起つて萬艦掃蕩せん、願くは公慮と爲さざれ』

蓋し當時皇國の興廢に關する大難を前にして、千辛萬苦せし時宗を策勵し慰安する好箇の名言であつたらう。

時宗は其の他に詮藏主や英典座からも心要を問ふたに違ひないが、又佛源禪師などにも參じて居る。佛源禪師とは大休正念和尙で矢張宋の人である、文永六年に來朝して博多の聖福寺に住して居つたのを文永十年に時宗は鎌倉へ招いて禪興寺へ住せしめたのである、佛源禪師語錄の中には大休が時宗に示した心要が出て居るが、其の一端

を示すと

『唯、直下の提綴を貴び第二念を起さず、忽爾として囚一下、生死の牢關を撃碎し便ち見じて過去に心を得すべからず、現在に心を得すべからず、未來に心を得すべからず、所謂一念生せずして前後を際斷し、方に生を出で死に入るも遊戯の場に同くするが如くなるべし、縱しんば卷舒を奪はるゝとも常に自ら泰然安靜にして、胸中に寸糸を掛けず、然も立處に眞を既し、用處に力を得し、凡そ百萬の士の領する一夫を驅るが如くにして巨敵を拂ひ社稷を安んじて萬世不拔の基を立つ、是れ皆佛性を悟るの靈驗なり、既に能く是の如くにして、所得すること有るを以て便ち足れりと爲す勿れ、更に須く密々履踐し、高々たる峰頂に向つて立ち、深々たる海底を行き、直に佛眼も覷ひ見ず、千聖も蹤を知る莫らしむべければ、方に是は箇の大自在安樂の人なり』

禪的經倫は實に斯の如くでなければならぬ。紛々纏綿たる俗情に把捉せられて生命の自由を失ふから、其處に理を見るの明、事に處するの斷が失はれる、若し自ら泰然安靜にし、佛性の作略をして自由自在ならしめば、俗情その儘悉く淨明の光を放つて快刀の亂麻を斷つが如き明快なる手段は隨處に現れるのである、偉人時宗は斯くの如くして元寇の難に處し、萬世の人をして其の雄を歌はしめ、皇國の偉風を千歳の下に輝かしめた、然り吾人は時宗の能く斯の如きを得たる背後に熱心なる禪的修養ありしを忘れてはならぬ。卽ち吾人をして云はしむれば、時宗をして能く此の雄を致し、空前の國難に處して誤らず、絕後の榮擧を贏ち得せしめたるは、兀菴なり、道隆なり、祖元なり、詮英二僧なり大休なりと云ひたいのである。

鎌倉圓覺寺開山佛光國師

一、幼より出家求道の志あり

既に記述せる如く、北條時頼公は兀菴禪師に就いて禪の悟りを開いた。其の子の北條時宗公は佛光國師に依つて又大に禪學を體得した人である。其の佛光國師とは卽ち鎌倉圓覺寺の開山なる事は人の知る如く、而も兀菴と同じく支那より請待されて來た人なる事は前にも述べた。今傳に記す所を見るに左の如くである。

本名は祖元と稱し無學と號し、宋國明州の慶元府に生れた人である。生れて一周年を經たる初誕生日に當り、父母は乳兒の天性嗜好の所在をためさんが爲め、種々樣々の物を陳列し兒をして之を取らしむるに、兒は笑つて唯一卷の御經を取れるのみ、他のものは何にも取らなかつた、之を見たる父母は將來僧となるべき因緣あるものかと竊に考へて居たのである。既にして七歳になるや學校に入らしむるに、單に覺えがよいのみならず萬事につき群兒に異つた所の頗る多く、假令蟲けらと雖も之を殺すを嫌ひ、又口に腥きものを食ふことを忌むといふやうな風情であつた。十二歳の時、或日父と共に或山寺に遊んだ、處が僧の

竹影掃レ階塵不レ動、　月穿潭底水無痕

と吟ずる聲を聞き少年にも似ずこゝに一種言ふべからざる感想を惹起されたものと見える、卽ち之を聞き何となく山寺を愛する心起り、志を出家の道に寄することになつたのである。

而も其の翌年に至り父は病のため此の世に無き人となつて仕舞つた。そこで愈々出家の志を堅くせられたのである。

二、一の公案に七ヶ年

卽ち十三歳のとき出家して杭州の淨慈山に走り北澗禪師に投じ出家の儀式を行ひ、越えて翌年卽ち十四のとき徑山に登り、前の兀菴の師無準禪師の門に入つた。時に無準禪師「狗子無佛性」の公案を授けられた。公案など謂つても禪宗のことを少しも知らぬ人には何の事か分るまいが、要するに師匠が弟子に向つて一の問題を授くることと見て差支ない。而も禪宗にあつてはこの「狗子無佛性」といふことが非常に大切な

問題になつて居る。

祖元禪師はこの公案を受け、唯一の無の字につきて晝夜參究工夫すること七年の久きに及んだとある。固より初めから七年間工夫するといふやうな考ではなかつたのは勿論である。一年之を修するに未だ悟る能はず、更に一年之を修するに尙ほ之を悟る能はず、又一年又一年と之を工夫して止めざる間に揣らずも七年といふ長い月日を送ることになつた。之を要するに七年間の其の間、禪堂に安坐して精神の修養を積んだのであるが、或夜四更(丑の時今の十二時)に及んで、首座寮の前にある木板の聲がカン〳〵と三下する聲の遠くなるのを聞き、忽爾として心に證る所あり早速師匠の前に走りゆき之を告げた。然るに未だ十分な證りでなかつたと見える。無準も充分に之を印可し證明するといふ程に至らなかつた。更に香嚴擊竹の偈といふのを以て試みられた。ところが祖元その應對に尙ほ澁る所あつたのである。

然るに無準禪師は其の後間もなく遷化せられたので、祖元は徑山を辭して諸方の名師を尋ね廻り、當時あらゆる名師として之を訪はざるものなく、隨つて修行の功を積むこと更に又十有餘年の久きに及んだ。一日或處に於て井戸の水を汲まんとするに轆轤のクルクルとめぐるを見て、圖らずも廓然大悟の境に到達せられたのである。卽ち先の「狗子無佛性」の公案並に「香嚴擊竹偈」の深旨まで——一時に釋然して大悟徹底することを得るに至つた。轆轤のめぐるのを見て、大事を悟つたなどいふことは常識を以ては到底解すべからざることであるが、しかしてゝ禪の妙處がある。又こんなツマラナイ事で一朝大事を究むるに至りしは、畢竟多年この事に苦辛せし結果たるや勿論である。時に祖元禪師が愈々大悟徹底し、精神修養の目的を達するに至られしは三十六歳の時であつた。

三、國師號を贈られたる高贈

祖元禪師は其の後台州の眞知禪寺といふ寺に住して居られたのであるが、時は宋末の頃なれば元の兵は國內を蹂躙し來り、亂暴狼藉を極め或日其の寺に亂入し來るとい

ム有様、寺僧は皆悉く他に逃亡せしも祖元禪師一人寺に殘つて平日の如く方丈に坐禪して居られたのである。數名の兵士は白刃を以て禪師の頭に擬した一段の商量は前章に詳述せる如くである。

祖元禪師は其後北條時宗の特に人を派しての懇篤なる請聘に應じて來朝した。卽ち弘安三年六月を以て筑前の博多に到着し、同年八月を以て鎌倉に來り、時宗公の歡迎を受けて先づ建長寺に住し、尋いで弘安五年には特に圓覺寺を建て、其の開山第一世として迎へられた。然るに弘安九年九月三日を以て病のため圓覺寺に於て入滅せられた。時に後宇多天皇其の德を旌さんがため特に勅して「佛光禪師」の號を贈りたまひ後に光嚴天皇また重ねて『佛光常照國師』の號を贈りたまへる希世の高僧である。

聖一國師辯圓の生涯（京都東福寺開山）

一、天台より禪門に　る

辯圓は幼にして志を佛道に傾け、十歳にして出家得道、天台宗に入り十五歳となれる頃には時々講師を難詰し、自ら先賢未發の考を陳べ、人をして驚歎せしむることありと言ひ傳へられてある。十八歳にして髮を江州三井の園城寺に剃り、奈良東大寺の戒檀に登つて得度受戒の式を終へ、尋いて京都に出で、儒教を學びしが、一日猛然として獨り志を決し、京都を去り、又園城寺を辭し千里を遠しとせずして、下野國の長樂寺に住める榮朝和尙を（榮西弟子）訪ひ、教外別傳の道を問ふた。是れ卽ち辯圓が天台宗より禪宗に轉ずるの動機である、時に彼は二十歳位の時であつた。

既にして又鎌倉に來り壽福寺の行勇和尙（榮西弟子）を訪うて同じく禪法を習ひ、又傍ら當時一方の學匠として英名の轟ける大歇了心の「首楞嚴經」の講義をも傍聽せしが、時々難問を呈し其の答辯に苦ましめたこともある。加之ならず園城寺の賴慧僧正は、當時三井第一流の學匠なるを以て、時人呼んで「三井の大鏡」といへるほどの人なりしが、恰も此の頃鎌倉鶴岡の八幡に來つて「法華經」を開講しつゝあり、辯圓往いて之

を傍聽し、また時に難詰を試み、其の答辯に窮せるを見て戯れに「我れ久しく大鏡の名を耳にす、所謂大鏡は鐵にあらずして瓦なりや」と。されど賴憲敢て之を怒らず、却つて辯圓を稱讃して彼れ恐くは「鶩子の再來ならん」と言へりと、實に彼れが智慧辯才は天下に敵なき有樣であつた。

其の鎌倉に在りし年月は不明瞭なりしも、彼れは此の間に禪學を以て精神を修養すると共に、又經論の研究にも怠りなくして一切藏經を閲すること前後四回に及んだ。されど精神上の大問題に於て未だ解決し得ざるものあつて、四條天皇の嘉禎元年卽ち三十四歳の春を以て遂に航海の途に上り、十有餘日にして宋國明州の界に到着することを得たのである。時維れ道元禪師の入宋より十五年の後であつた。

二、徑山に登つて無準禪師を禮す

到着の初め景福院に於て、月宗主より戒律上の話しを聽き、又天竺寺に於て柏庭善月より天台の教義を承くといへども、航海の目的は禪道の修行であつた、故に痴絶冲石田薫並に笑翁堪等に參じ、尋いで徑山に登り、無準禪師師範に謁することを得た。機緣といふは誠に妙なもの、先きに道元禪師が無準禪師に遇うて相叶はず、後如淨禪師に遇へば初めより舊知の再會せるが如く、師弟相互に密の如き熱情の間に嗣法するに至つたのであるが、今辯圓は、初めて純の無準禪師に謁するや、恰も先きに道元如淨禪師に遇へるが如きものあつて、悅んで其座下に屈し、師薫を被りつゝありしが、遂に大事を極め得て、其の衣鉢を受くるに至つたのである。時維れ宋の淳祐元年にして日本の仁治二年であつた、卽ち辯圓四十歳の時である。

是に由て此を觀るに、辯圓就學の初めより起算すれば三十餘年、禪門に歸してより歸算すれば二十餘年にして方に大事を極めたりと謂ふべきである。

辯圓既に嗣法の大事終れば、無準禪師より親書の宗脈、並に法衣及び竹杖等を法信として授かり、四年四月彼の地を辭して歸東の途に就いた。

三、三上皇師事せらる

既にして辯圓が筑前の博多に歸着するや、同地に堪慧なる者ありて、既に横嶽山に新寺を造つて居た、而して今や辯圓の歸朝を聞き、歡んで彼れを其の新寺に迎へて開堂式を擧行し請じて第一世となす、今の崇福寺がそれである。又宋人にして當時博多に寄留せる謝國明なるものは、博多の東方に當りて承天寺といふを創し、又辯圓を請じて之に主らしめた。然のみならず、肥前國氷上山葦壽寺の榮尊は其の寺を改めて禪刹となし、辯圓を迎へて同じく開山第一世と爲す。かくの如く辯圓の歸朝するや忽ちにして西國に三箇の禪刹を興すに至つた。其の聲望の如何は推して知るべきである。

時に横嶽の堪慧、事故あつて京師に出で、時の大相國藤原道家に謁し、事に因みて辯圓の英傑なることを告ぐるや、道家其の言を信じ卽時使者を發して辯圓を京都へ迎へんとす。辯圓卽時命を奉じて出京、道家の別邸卽ち月輪殿に入り、連日道家のために說法するや、道家公の歸依斜ならず。是に於て道家奏して僧正に任ぜしめんとすれども、辯圓固辭して之を受けなかつた。更に改めて日本國總講師に補せんとするもまた同じく之を辭して受けなかつた。此に於て道家自ら聖一和尙の四字を書して之を與へた。後日、花園天皇之を國師號として宣下したまへり、是れ聖一國師の名天下に轟き今に存する所以である。

是より先き道家公、京師の東南に當りて大伽藍を造營した。初めは南都の東大寺と興福寺と兩方の名を合して取り之を東福寺と號し、以て八宗兼學の總道場たらしめんとする希望であつた。然るに今や天下の明師卽ち辯圓を得、而も自ら其の敎に服するを以て、之を禪寺となし、辯圓を以て其の開山第一世と爲すに至る。是に於てか辯圓の聲望は隆々として朝野に輝き、都鄙の間に赫々たりといふべき有樣。卽ち後嵯峨後深草及び龜山の三上皇の如きは、何れも皆辯圓よりして菩薩戒を受け、又禪要を聽き、殊に「宗鏡錄」を習ひたまふた。虎關和尙師錬嘗て龜山上皇に侍し奉つるとき几頭に御控の「宗鏡錄」を拜覽するに其の卷尾に「朕得爾師之此錄見性已了」との宸翰の爛然たるものを見ると言へり（東福寺記、及釋書）皇室の御歸依のほど、亦以て思ひ知るべきで

ある。

四、各宗の宗匠及儒者其門に入る

又北條時頼は關東にあつて其の英名を傳聞し、遙に延請せしこと數回に及んだのである。しかのみならず、延曆寺の座主慈源僧正宗天台を初めとなし、生駒の良遍宗法相木幡の眞空宗三論戒壇院の圓照宗律等、かくの如き各宗の學匠も來つて其の講席に列するもの少なからずと傳ふ、愈々以て其の名望知るべきでないか。

辯圓、元來博學達識、加ふるに禪機を以てす、故に智辯無礙にして何人も抵抗すべからざるものあつたと見える。惟に當時の日本は禪宗を知る者至つて希れなり、參學の徒といへども多くは禪を疑惑する者であつた。而して辯圓人を接するの方術として先づ其の人の嘗て修めし學問に就いて之を難詰し、其の詞屈するを見て「未だ自家を委しくせざるもの何ぞ他家、卽ち我が別傳の趣きを知るべけんや」といふを以て殆んど常例となせりといふことである。

時に儒者菅爲長なる者あつて一度辯圓と相對し、儒佛兩道の優劣を對辯せんとする志ありて之を道家公に訴ふ。或日道家公の紹介により兩人面會することを得るや辯圓まづ口を開きて曰く、菅公は儒學に從事せらるると眞に然りやと。爲長これに答へて然りといふ。時に辯圓その語に應じて曰く

「我が法は佛々祖々傳承し來つて、師承なきものは之を虛妄として信ぜず、卽ち釋迦世尊よりして五十五世達磨和尙よりいへば二十七代、以て我れに至る、故に佛敎徒は皆釋子といふ、知らず菅公は孔子より幾世を經るや」と

時に爲長一言の下に詞屈して退き、また言ふことを知らざりきと、凡そ辯圓の人を接するの方法概してこんなものであつたと見える。辯圓の逸事として語るべきもの尙ほ多しといへども餘論に亙れば之を略する。要するに同時代にして等しく禪學を傳へ來る人なるにも拘はらず、道元禪師と聖一國師と、其人となりに雲泥の相違あることは前述を以てすれば粗想察するに難からぬであらう、隨つて又其の家風の同じからざる

こと推して知るべきである。後宇多天皇の弘安三年十月十六日東福寺の常樂菴にあつて命終らせられた世壽七十九歳であつた。門下頗る多しと雖も著名の上足は南禪寺の開山となりし無關普門和尚である。

御嵯峨天皇の御子佛國國師

一、聖一國師の門に入る

下野の那須山に雲巖寺といへる寺のあることは、彼の地方に一度行つて見たことのある人なれば大概これを知つて居らるゝことゝ想ふ。隨分名高き禪刹である。さて其の開山は佛國應供廣濟國師といへる貴き高僧なることを知る人は極めて少ない。

佛國國師諱は顯日、字は高峰といふ人であつて、其の生れを問へばかしこくも御嵯峨天皇の御子である。母は藤原氏仁治三年城西の離宮に生れたまひしに、日夜異しき光あつて其の家を透し、空中に輝くあり、人驚きて之れ失火ならんと誤認せしほどのことであつたといふことである。而も產時の屑玉の如くいと潔くしてまた自然の香氣ありと傳へてある。幼時より腥きものを食はず、また徒らに嬉戲することなく、坐すれば必ず跌坐禪するを以て兒の習ひとして居たといふ。思ふに天性非凡の所があつたと見える。

十六歳の時東福寺の聖一國師を師と賴み、出家落髮を遂げさせたまひ、昨日までは尊き皇族家の御身なりしも今日よりは東福寺の小僧となつて童役を執り、修行の道に就かれしが、閑あればまた必ず坐禪して居らるゝので、坐禪小僧といへる異名を授けらるゝに至つた。

時に偶々兀菴和尚が支那より來遊し、初め東福寺に憩ひしが暫らくあつて北條時賴公の招に應じ、鎌倉に赴かるゝことになつたので、聖一國師は兀菴和尚がただ獨り來て誰も隨身の者なきを見て其の不便を感じ、十名の者を選んで兀菴の東行に侍せしむることに致されたのである。而して顯日和尚も其の一人であつた。然るに鎌倉に來て

見れば圓覺寺はまだ出來て居なかつたか、既に建長寺あり、壽福寺あり、又淨妙寺、淨智寺及び萬壽寺等あつて、これらの寺院には數多の禪僧が集つて居たに相違ない、而して顯日和尙は特に皇族の御方であるといふので、宿老の人よりも又一般の雲衲よりも大に畏敬せられ、且つは優遇する所あつたものと見える、然るに顯日和尙其の人にあつては却つてこれが迷惑であつた。乃ち叢林の生活がいやになつた。

二、遠く人煙を避けて那須山へ

そこで其の翌年幽靜閑雅にして參禪に適する地を求めんとて瓢然鎌倉の地を辭し、遠く下野國に走つて那須山に入り、今の豚小屋よりも尙遙に劣れるやうな、わびしき小菴を結んで獨り之に閑居し、明けても暮れても靜坐工夫に餘念なく、唯精神の修養にのみ勉められたのである。道のためとは申すものゝ皇族の御身としてかくまで御盡し遊ばされしことは誠に恐れ多い次第と云ふより外はない。

初めの間は誰も之を知る者がなかつた。然るに年月を經過する中に誰が披露するともなく遠近に知れ亘ることになつて來たのである。人の之れを知ると共に、禪客の跡を尋ね來たるもの頗る多かつた。然れども堅く門戸を閉ぢて容易に接見することを許さなかつた。よし面會しても自己の修養未熟を耻ぢ師として他に禪道を說くことを絕對に避けられたのである。

時に近傍に篤信者あり、顯日和尙のために寺を造らうとした。處が和尙は之を喜ぶにあらずして却つて大に之れを呵し「我が此に來り住するは樹下石上にあつて草衣木食せし古人の遺風を學ばんがためである、若し殿堂を要せば京都鎌倉を初めとなし、寺は諸方到る處に澤山あるでないか、今こゝに之を造つて何の爲めにするか、畢竟無用の業である」と申された。其の精神の高潔なる誠に感ずべきの至りである。

然るに彼の有志は之に對して言へるやう「師の之を辭せらるゝや頗る道理あるに似たれども、往時釋尊の御在世に須達長者なる人あつて佛のため精舍を造れるに佛は敢て之を禁じたまはざりしと聞く、されば我れ今師のため寺を造らんとするもの、師敢

て之を制するの謂なし、吾等の意志に任せたまへ」此に於て師もまた之を許さゞるを得ざる場合になつて來たのである。そこで遠近を問はず富める者は喜んで物を施し、貧き者は競ふて勞働に當り、忽にして巍然たる殿堂及び円廊等が成就した。其の開堂の日に當るや四方より集り來る雲衲實に一萬指に盈てりといふ人也是れ卽ち今の東山雲巖寺である。

三、端坐修業二十六年

時に從前顯日和尙が東福寺にあつて聖一國師に事へしは五年間であつた。尋いて兀菴禪師に從ひ、鎌倉建長寺に在りしは僅に一年であつたが、鎌倉を辭して下野の那須山に隱れ、專一に坐禪して精神を修養せしこと實に二十有餘年の久しき間である。されど尙ほ以て豁然大悟の境に至らなかつた。時恰も佛光國師祖元が北條時宗公に迎へられ、來つて鎌倉の建長寺に在りといふことを聞き、下野長樂寺院豪和尙の紹介により、鎌倉に詣つて祖元和尙を禮し、弟子として其の指導を仰がれた。那須と鎌倉との間は隨分遠隔の地にして、而も今日と異なり、唯交通機關のなきのみならず、道路も至つて惡かつたに相違ない。されど爾來其の間を屢〻往復し遂に弘安四年九月三日を以て愈〻大悟徹證……卽ち禪宗の謂ゆる眞の悟りが開けたといふ證據の信衣並に法語を祖元和尙より受けられたのである。而して其の時は聖一國師の門に入りてより實に二十六年目であつた。

既に佛光國師祖元に遇うて大事を究められし高峰顯日和尙は、其の後どうせられしやといふに、爾來二十年の久しき間從前の如く下野の雲巖寺に坐し、唯の一日と雖も休息することなく、四方より集り來る雲兄水弟の敎育三昧である。初めは自らの修養が未だ足らぬといふ所より、折角遠方より尋ね來りしものも皆悉く之を遮りて會ふことだにも容易に許されなかつたのであるが、今や既に修行功積み祖元和尙の證明を得て師家の地位に昇られたのであるから、四來の雲衲を引受け、之に接することにせられたのである。其の盛んなるときは、常在の雲衲一千名を超ゆることがあつたと云

ふことである。

四、國師の臨終と其門下

當時大應國師紹明なる高德あつて、筑前國横嶽の崇福寺に禪堂を開かれしが四方より來集せるもの極めて多く、是れまた常在の雲衲一千と稱したのである。そこで當時參玄の徒下野の那須と筑前の横嶽とを指して「天下の二甘露門」と稱し、兩方の中いづれかの門に入らざるを以て恥とする風情であつた。其の盛況眞に思ふべきである後に鎌倉の淨妙寺淨智寺萬壽寺及び建長寺に歷住し、正和五年十月二十日壽七十六歲を以て雲巖寺に示寂せられた。滅後勅して佛國應供廣濟國師の諡號を賜つたから、後來略して之を呼び、佛國國師といふことになつて居る。

時にこの人に就きて吾人の記憶すべきは彼の足利時代に於ける佛敎界の大立卽ち夢想國師疎石並に大燈國師妙超の二大禪師が共に佛國國師顯日の門より出た人であつたといふ史實である。大燈國師の如きは佛國よりも大應國師に請益する所多かりしも夢想國師の如きは全く佛國第一の法子である。

修業時代の夢想國師

一、心窃かに敎外別傳を慕ふ

鎌倉室町時代に多々輩出せし禪僧にして、生きながら名望高く一時朝野を風靡せし生前の偉僧は實に夢想國師である。夢想國師の足利尊氏に於けるや、恰も行基良辨の聖武天皇に於けるが如く、又傳敎の桓武天皇に於けるが如く、又弘法の嵯峨天皇に於けるが如きものありて、實に當時名望家としての第一流は夢想國師であつた。

夢想國師は伊勢の人である。姓源氏にして、宇多天皇九世の孫なりといふ。四歲の時已に母に別れた。是に於て其の父全家を提げ一族皆甲州に移つた。蓋し何乎の事情あつてのことであらう。年甫めて九歲父に從ひて同國の鹽山に住める空阿法師の所に行き出家を求む。時に空阿法師色々の書物を授けて之を試みるに、一讀すれば必ず之

を記憶して忘れず、而もよく其の意を了す、眞に曾て習へるものゝ如くであつたと謂つてある、例の天才なりしや固より疑を容れぬのである。

明けて十歳亡母の忌日に當るや、一七日の間獨り「法華經」を讀誦して至心に母の冥福を祈り、又自ら死屍九相の圖を畫きて之を壁上に掛け、以て此の身の深く執着すべきものにあらざることを觀察した。或はまた時あれば、靜閑の所に獨坐し、以て澄心するを常となす、是れ卽ち彼れが修養の端的である。其の所業の都べて兒童に類せざりしこと思ひ知るべきである。

十八歳の時に剃髪し、南都東大寺の戒壇院に登り、示觀律師を仰いで受戒し、此に名を智曜と改む。受戒の事了るや、一旦甲州に歸るといへども、暫くあつて笈を四方に負ひ、各宗の明師を尋ねて其の門を叩き、顯密の二教を學んだ。然るに一朝自ら以爲らく「佛教多種なりと雖も歸する所は蓋し一なるべし、而も其の歸する所に至つては、解學の企て及ぶ所にあらざるべし」と。此に於て心竊に教外別傳の宗意を慕ふ

と雖も、而も未だ之を決するには至らず空しく數年を經過した。

二、一事一山及顯日を訪ふ

時に、一夜佛陀に祈誓を籠め、懇に其の指導を仰がんとするに、夢の中にあつて宋國に遊學し、疎山と石頭との兩寺に參詣するに、一人の老翁あつて、達磨の肖像を齎し來り、之を授けて曰く「汝克く之を奉持せよ」と。既にして夢さむるや、自ら我は禪宗に因緣あるの靈告なりと思ひ、是より名を疎石と改め、夢想を以て其の號となすに至つた。されば夢想はもと自稱にして、後に後醍醐帝取つて以て、之を國師號とせられたのである。

夢想は是より教家を離れて全く禪門の人となり、まづ京都に出でゝ、無隱和尚を建仁寺に拜し、朝暮此の人に參究し、坐禪の道に怠らず、之がためには殆んど寢食を忘るゝに至つたのであるが、尋いて又鎌倉に移つて無及桃溪葦航癡鈍等道一門下の諸師を建長、圓覺兩寺の間に歷問し、益々禪道によつて精神修養の歩を進ましむといへど

も、未だ大悟徹底の境に至らず專心工夫を凝らして居た。時に宋國より一寧一山今や來って建長寺に住す、因つてまた其の室に參禪して大事を究めんとす。

然るに羽州の舊友某を訪はんがため、一時鎌倉を辭して羽州に赴かんとして途上其の訃音に接し、暫く錫を奥州松島寺に掛けて此に休息し、傍ら或法師の講筵に陪すといへども、解學は已に自分の欲する所にあらざれば、倉皇其の所を辭して鎌倉に歸り再び寧一山を圓覺寺に拜し、謹んで其の指導を仰がんとす、卽ち一日其の室に至つて曰く

「某甲未だ大事を極めず、請ふ和尙よろしく我れを指導したまへ」と。時に寧一山の曰く「我宗に言句なし、又一法の與ふべきもの無し」と。夢想懇に請うて曰く「和尙願くば慈悲方便する所あれ」と、寧一山答へて曰く「慈悲も無く方便も無し」と。

爾來幾度入室するも、唯かくの如く慈悲も無く方便も無しと言へるのみ、更に一言の說いて聞かせることなければ、夢想自ら以爲らく、向上の一路は眞に然るべし、されど我れ今敢て向上の一路を聞かんとするにあらず。唯初入の方便を求めんとす、然るに和尙の之を示さゞるは是れ畢竟其の意の通ぜざるの致すところなりと、乃ち去つて當時鎌倉の壽寺を董せし佛國國師顯日を訪ふたのである。

夢想が佛國國師顯日の室に入つて一拜するや、顯日和尙まづ問うて曰く「寧一山、此の頃汝に對して何の言句ありやと夢想之に答ふるに前話を以てした。其の時佛國大に聲を勵まして曰く「汝何ぞ言はざる」「和尙漏逗少からず」と、卽ち言ひ過ぎたりといふのである。夢想の之を聽くや、其言下に於て稍々省悟する所あれど、尙ほ未だ心に穩かならざる所あり、故に自ら寧一山に對し誓つて曰く、

「我れ大休歇心安の場に到らずば復和尙に見えず」

と卽ち去つて常州の臼庭といふ處に隱れて、晝夜を分たず兀坐精勵して止まざりしが一夜久坐し起つて壁に憑らんとするに誤つて壁の無き方面に向つた。是に由て突然身の轉倒することに遇ひ、其の機會に圖らずも廓然大悟したのである。投機の偶として

夢想の大悟底を吟ぜし偈がある。即ち左の如し、

多年掘地覓青天、　添得重重礙膺物。　一夜暗中颺碌甎、　等閑擊碎虛空骨。

即時佛國の室に趨つて、此の偈を呈するや、佛國は種々之を驗みる所あつて、後遂に之を印可した。時維れ嘉元三年にして夢想三十二歳の時であつた。即ち彼れは十歳の時より精神修養にかゝり、三十二歳の春を竢つて遂に成功したのである。

三、悟後の修行より鎌倉召喚まで

夢想は是より後、更に又悟後の修養につき瘁せし經驗少なからず。即ち師の印可を得るや、一先づ甲州に歸りて親を省み孝養の道を盡くさんとす、時に檀越某あつて淨居寺といふのを造つて之に居らしむるに、四方の禪客その名を聞いて來り集まるもの頗る多し。之に依て應長の春、淨居寺を辭して、人煙を隔つること三十里（六丁一里なるべし）なる深山に自ら小菴を結びて之に居た。龍山菴と稱するもの是である。然るに四來の禪客例によつて多し、是を以て佛國國師は延て上州の長樂寺に住せしめんとするも、固辭

して之を受けず、又二三の同學と共に龍山菴を去つて美濃の國境に入り、長瀨山の幽景を見て之を賞し、其の地を去るに忍びずして、又こゝに小菴を結んで之を古溪菴と稱し、この所に閑居するに至つた。

彼れはかくの如く山間僻地に身を隱くし、山紫水明を友として、悟後の修養を凝さんとするも、其の芳名は既に四方に傳はつたのである。殊に鎌倉の執權職北條高時の生母、覺海夫人遙に夢想の人と爲りを聞きて、之を關東に迎へんとするあり。而して夢想は使者の未だ來らざる先きに當つて已に之を豫知し、倉皇古溪菴を去つて、遠く土佐國に赴き彼の國の五台山の汲江菴に隱れて其の跡を暗ました。以て幕府の命を避けんとしたのである。然るに鎌倉の搜索よく行き屆き遂に之を見付け、遠く專使の彼の地に下れるあつて、之を辭せんとするも辭する能はざる場合に相遇し、遂に已むを得ず土佐國より相州鎌倉に赴いた。時維れ文保二年にして、夢想四十三歳の春であつた。

身を世俗の外に處して、獨り煙霞を友となしつゝあるが如き、彼れ夢想をして、擂らずも世上の風塵に染ましめ、他の禪林の諸高僧に異なり、何んとなく俗化の觀あらしむるに至りし端緒は實にこの鎌倉の招聘であつた。

彼れ轉じて鎌倉の命に應じて關東にあるや、又後醍醐天皇の知ろしめす所となり、正中二年天皇の特使は遠く關東に降つた。爾來南北朝の間に立つて、所謂向下底の活動時代に入つたのである、此間の消息は後章に詳述する考である。

南北朝の和睦を圖りし偉僧

一、禪林の花一時に繚亂

鎌倉町時代の偉僧夢想國師の後半生の事蹟を述ぶるに方り、先づ第一に國師は日本禪宗史上如何なる置位にあるかを知つて置かねばならぬ。

日本に於ける禪宗の歴史は前にも述べし如く、榮西禪師が支那から禪宗を傳へられて、之を我國に弘められしに初まつて居る。續いて聖一國師が出られ、入宋して無準禪師に法を嗣ぎ、歸朝後上下の崇信を一身に蒐め、大法を宣布したのであるが、當時我國にては眞言、天台の全盛時代故、種々なる事情に纏綿され、公然禪風を擧揚するに至らなかつた。其後支那から大覺禪師道隆蘭溪、つゞいて佛光國師祖元子元が我國に來り、茲に初めて禪の勃興を見るに至つたのである。而して大覺禪師の弟子に大應國師あり、佛光國師の下に佛國國師が出られて、日本の禪宗は漸次盛大に赴いて來た。

大應國師の跡に有名な大燈國師あると共に、佛國國師の下には今茲に述べんとする夢想國師が出られたことは前にも一言した通りである。斯くして上皇室を初め將軍家より、下は一般武士及其他の有力者は悉く禪に參じて精神修養の要諦とした。されば京幾は忽ちにして禪家の花が繚亂と咲き誇つたのである。

二、召されて官寺に住す

夢想國師は建治元年伊勢の國に呱々の聲を擧げしことは前章に説いた。爾來七十七

箇年の間、當時多々輩出せる禪僧を壓して、名望獨り高く朝野を風靡せるのみならず足利尊氏及直義の師となりて其精神上の敎化をなせる外政治上の顧問として、恰も德川家康に於ける天海僧正の如き位置にあつたのは、吾人の觀察をして誤りなからんには、素より國師の本意ではなかつた。

前章に述べし如く、彼は甲州の隱棲地に在つて只管悟後の修行中鎌倉の執權北條高時の生母覺海夫人、遙かに夢想の人となりを聞き、之を鎌倉に迎へんとした。けれども夢想は斯る權門に近づくを快とせず、密に遁れて遠く土佐國に赴き、五台山の汲江菴に隱れて其跡を暗ましたが、鎌倉の搜索よく行き屆き遂に之を知らるゝに至つた。

樹下石上を以て道を成ずべしとせる禪徒等は、茲に宏大壯麗なる伽藍を興して、各々道場を構へるに至つた。黃金時代の出現これ果して禪門の向上か將た向下か。而して此間に身を處せし夢想國師の動靜は頗る注目に價する事柄である。

國師一度鎌倉の命に應じて關東に來るや、後醍醐天皇の知ろしめす所となり、特使を派して京に招き、禪宗の樞要に就て御下問に與かつたのである。其時の國師の提唱はいたく帝の御意に契ひ、直ちに南禪寺の住職たるべき勅令が下つた。時維れ正中二年。御諚止むなく一時官寺に住せしも、其翌年辭して再び鎌倉に來り、又官命によりて淨智寺圓覺寺等を歷住し、其後更に甲州に歸り慧林寺を創し開山第一世となつた。

此時北條高時は建長寺に國師を請すれども、之には應じなかつた。國師の活眼早くも高時の謀反を知り、其末路を考へたからであらう。國師の達見は實に驚くべきものである。

三、天皇勅して國師號を賜ふ

間もなく天下は麻の如く亂れ、後醍醐天皇は一時大和の笠置に幸きしたまひ、元弘三年五月足利尊氏新田義貞の軍勢北條を亡ぼして、天皇再び皇城に還御あらせられたる建武中興の業となつたのである。

足利尊氏の夢想國師を知るに至つたのは此時である。天皇は尊氏に勅し、國師を招

喚せしめて臨川寺を創し、之を與へて開山とし、更に夢想國師の四字を賜ふた。夢想とは其號にして疎石が本名である。生前に國師號を賜ふたる高僧は稀であるが、此一事を以て見ても、天皇の歸依如何に深かりしか國師の光榮思ひやらるゝのである。

然るに茲に端なくも、建武の中興は破れて、新田義貞と足利尊氏との衝突となり、建武三年尊氏は大軍を率ひて京師に侵入し、天皇また叡山に幸きしたまふに至り、天下は再び亂れて實に慘憺たる有樣となつた。

夢想國師は之より先き、後醍醐帝の詔を奉じて再び南禪寺の住職たりしも、此大亂を見るに及んで早くも辭して了ふたのである。想ふに、國師の南禪寺に住せるは勅命なりとは云へ尊氏の推薦である。今尊氏は西に落延びて在る以上、自らは其位置に安んじて居るに忍びなかつたからであらう。要するに國師は非常に敏活な人であつたに相違ない。

四、先皇追福のため天龍寺を創す

聽て尊氏は室町に幕府を開き、國師を迎へて自ら弟子の禮を執り、以て其教を仰ぐに至つて交情益々濃かになつた。建武五年五月、國師は尊氏に勸めて戰亂に處せし罪障消滅のために、日本全國に安國寺及利生塔の建立せんことを發願した。恰も聖武天皇の國分寺の如く、一國一寺一塔を建てゝ漸次國内全部に行渡らせんとしたのである。而して發願空しからず遂に五十七ヶ國に及んだ、殘り九ヶ國は南朝の勢力範圍たる京幾方面には手が屆かなかつた。

然るに曆應三年、後醍醐天皇は吉野に於て崩御遊ばされたのである。期逸すべからずとや思ひけん、夢想國師は尊氏に說くに、此際よろしく大伽藍を造營し以て天皇の御冥福を祈り奉り、又併せて尊氏自身の罪業を懺悔すべき事を以てした。尊氏其說を容れて之を上奏し、御嵯峨。龜山兩上皇の仙宮にして後醍醐天皇に尤も因緣深き嵯峨の地を卜し茲に大伽藍を建立し、曆應寺と稱して夢想國師を開山第一世とした。後改めて靈龜山天龍資聖禪寺と號したのである。是れ尊氏の覇業今將に成らんとする勢

力を以て造營したのであるから輪奐の美洛西第一を以て稱せらる。塔頭凡そ一百五十を以て算せらるゝに至つた。今の天龍寺が卽ちそれである。其祈願文は左の如し。

爰元弘以來、天下大亂、不翅戰場兵卒多殞軀命、至子山野飛走、亦罹其餘殃、神廟佛堂、朱門白屋、或爲兵火所焚、或爲賊徒所壞、嗚呼災之害物、莫加於此矣、繹其天災之來歷、出手世運之否屯、所謂否屯不從外來、此乃積劫業債之使然也。業債因由亦非他作、只是一念無明之所感也。自非夙植深厚之人、莫能知之、或有知而故犯者、佛祖亦未如之何也已矣。玆者、征夷大將軍源朝臣、左武衞將軍源朝臣、眞智內篤、靈機外發、自懷慙愧、欲謝僣尤、具陳丹悃、上達叡聞、所伸懇志、深協叡襟、乃奉聖旨於扶桑國中、每州建立一寺一塔、普爲元弘以來戰死傷亡一切魂儀、資薦覺路又曆應年中特立叡願革此皇宮、以作梵苑、奉爲先皇、嚴飾寂場、又命武家董其營造、經年未幾、不日成功、寔是君臣道合、天龍保持之所致耳、便見物不終否、惡事轉成善事、法無定相、逆緣却爲順緣、此所以其禍福同源、寃親一體者也。

五、足利尊氏を濟度す

以上の祈願文にもある如く、法に定相なし、逆緣却て順緣となる。此所以に其禍福同源、寃親一體の爲也。と云ふ見地に於て尊氏を濟度した。而して後に天龍寺と改めてより一日尊氏の出向になつた際の法語が今日「夢中問答」の中に傳へられて居る其一節に曰く

今我朝ノ武將トシテ、萬人ニ仰ガレ玉ヘルコトハ、偏ニ是宿善ノイタストコロナリシカレドモ、猶モ世ノ中ニ敵對申ス人モアリ。(中略)元弘以來ノ御罪業ト、其中ノ御善根トヲタクラヘバ、何ヲカ多シトセンヤ。此間モ御敵トテホロボサレタル人幾何ゾ、其跡ニノコリ留リテ、ラウロウシタル妻子眷屬ノ思ヒハ、何クヘマカルベキ御敵ノミニアラズ、御方トテ合戰シテ死タルモ、皆御罪業トナルベシ、其子ハ死テ父ハノコリ、其父ハ死テ子ハ存セルモノアリ。サヤウノ歎キアル者數ヲシラズ。セメテ其忠ニヨリテ恩賞ヲ行ハレタラバ、ナグサム方モ

アルベキニ、其身大名ニモアラズ。強縁モモタヌ人ヲバ、御耳ニ入ルヽ人モナケレバ、訴訟モ達セズ。其面々ノ惧ヲモ謝シガタシ。今モ連々ニ目出タキコトノアルト聞ユルハ、御敵ノ多クホロビテ、罪業ノカサナル事ナリ。

次に安國の建立は一面より見れば慥に政策とも思へるのである。私の考では之を以て、一は北朝の勢力擴張のため、一は人心鎮撫のためであらう。けれども其根本は亡魂を慰むる佛者の追弔に外ならぬ事と思ふ。天龍寺建立に就ても、太平記等を見ると、全く國師の勸めによつて、尊氏が自己罪障消滅の爲である事が明白である。又尊氏が國師に宛てた書簡を見ても其信仰は餘程堅固になつて居る。曰く、

天龍寺事、爲奉報謝先皇之恩德、蒙今上之勅命、爲御開山建立訖、公私之發願、濫觴異他、現當之願望、仰伽藍之照鑑、仍當家之子孫一族家人等、及末代專當寺歸依之志、寺院並寺領等事、可抽興隆之精誠、若現不義及違亂者、永可爲不孝義絶之仁候也。可得此御意候。恐惶敬白

觀應二年八月十六日　　尊氏　御印

とある。乃ち一族家人は末代迄も寺院の興隆を念とせよと謂ふ發願である、而して永く國師をして天龍寺に錫を留められんことを希ふた。

六、其發願文は天下の珍寶

一方の弟直義は元から佛敎には造詣が深かつた。夢想國師に歸依する以前より暫々禪僧梵仙空仙等の說法を聽いて居られたのである。されば國師よりは古山の號を貰ひ、尊氏も亦仁山の號を頂いて居た。而して此三人が、高野山金剛峰寺に納めるために寶積經の要本を寫して納められたものが今日に傳へられて居る。加之、頭に「南無釋迦牟尼佛唯身舍利」の十一字を入れて、當時知名の歌人より歌を募集して高野山に納めた。之が亦天下の珍品である。元祿時代に前田家が非常に之を所望して永久寺領三百石を寄進するからと云ふたが高野山では承知しなかつた。其後伽藍が大破に及び其修繕費に困つて、終に前田家に渡し、黃金三百枚を得て修繕は滯りなく濟んだのて

あるが、前田家では今日でも唯一の寶物として秘藏して居るとの事である。

七、七朝の國師と稱せらるゝ所以

國師の勢力は實に今日吾人の想像以上である。觀應元年國師が病氣に罹つたので某と云ふ醫師を遣はして治療したが直ちに全快した、依つて某醫は宮中の典醫に採用されたとの事である。

夢想は生存中國師號を拜受すること前後三回、逝去後四回に及んだ、是を以て七朝の國師と稱せらる。卽ち

建武二年	後醍醐天皇特賜	夢想國師號	
貞和二年	光明帝特賜	正覺國師號	
觀應二年	光嚴帝特賜	心宗國師號	
延文三年	後光嚴帝勅諡	普濟國師號	
應安五年	後圓融帝勅諡	玄猷國師號	
寶德二年	後花園帝勅諡	佛統國師號	
文明三年	御土御門帝勅諡	大圓國師號	

斯の如き例は我朝に於て外には誰もない。國師の勢力の偉大なる一例とも見るべきは曾つて五山の僧が「化松石」の題を以て詩を作つた。然るに國師の名が前にも云ふ如く疎石と云つたので、其名の石を犯したと云ふ意味に於て、而も博學を以て聞へて名僧四人迄も流罪に逢ふたのである。これらは其一例であるが、以て其當時の國師の勢を想像せらるゝのである。

八、南北兩朝の和睦を計る

私は初め、夢想國師の尊氏直義の歸依を受けて居るのは、所謂、權勢の下に從つた風習として、國師も其一人であるとのみ思つて居たのである。漸次調べてゆくに從つて國師の性格も知り、其德望の偉大なるに驚いた一人である。されば其後尊氏直義がある問題のために其和睦を取計ふたのは國師の力に外ならなかつた。

國師は又南北兩朝の間を調停すべく非常に盡力されたのである。彼の天龍寺建立の如きも其一端と見る事が出來やう。委しい事は其當時の日記に誌されてある。而して終に意志の疎通を見るに至つた。これ丈の事は國師の偉大なる德化にして初めて成し得る事であつて他人の企て及ぶところではない。國師は寛厚にして柔和、忍辱にして溫順の性格と佛者の權威とを兼ね備へて居た。されば他の禪宗史上の人々の如く自ら進んで權門に近寄らんとするが如き卑劣の精神は毫もなかつた事は明白である。左に「夢中問答」の一節を擧げて、名利の念を戒め以て無上道を勸められた、國師の意中を窺はんと欲するのである。

問フ、今生ノ名利ヲ祈ルコソ愚カナレ、後生ノ果報ヲイノランハ、カシコシトイハンヤ、答フ、ヨノツネ人ノ今生ト思ルハ、前世ニ後生ト思ヒシ世ナリ、今又後世ト思ヘル世ハ、後世ノ今世ナルベシ、然リ前世ニ後世ノ祈トテセシコトハ今生ノ名利トナリニケリ、乃至、今世ノ夢ノゴトクナル名利ヲ祈ランヨリハ、當來ニ無上道ヲ成ゼンコトヲ祈レカシトスゝムルナリ、今生ノ名利ヲバウチステ、當來ノ名利ヲイノル人ハ、前世ノ業因ニコタヘタル定業ノ轉ジガタキヲモシヤト祈ル人ヨリモ、カシコキニハ似タレ共、夢幻ノ身心ヲ執着シテ、來生ノ果報ヲイノル意ノ愚痴ナル事ハ亦同ジ、タトヒ無上道ヲ祈ルトモ、若又一身ノ出離ノタメナラバ、是モ亦愚痴ナリ、大論云、菩薩ハ一身一衆生ノタメニ善根ヲナサズト云云、サレバ一切衆生ノタメニ、諸ノ善根ヲ修シテ無上道ヲ求ルヲ菩薩トハ申スナリ、(中略)愚人ハタマ〳〵佛ヲ禮スレ共、其心タヾ我信ズル一佛ノミニアリ、供養ヲノブル事モ又此心ナリ、タマ〳〵父母ノ追善、檀那ノ祈禱トテナスコトモ、其志偏ニ是我身ニみケテ恩アル人ノタメナリ、法界衆生ニ及スコトモナシ。コノ故ニ所得ハ功德廣大ナラズ、時ニアタリ緣ニ隨テ、一ノ佛ヲ禮シ一人ノタメニ善ヲナセドモ、其廻向ノ心廣大ナレバ、ウクルトコロノ功德モ又廣大ナルベシ。

と示されて、帝王も一平民も一視同人の佛者の教を明瞭に誌されてあるのが左の一文

である。

原夫佛法流通我朝已來、迨于七百餘歲、三百年來佛法日衰似沙門形而非沙門者多矣。田樂法師等是者法師力居爲恭敬之緣間有貴賈高僧、敎庠大德、其威儀亦弊、大都混乎世俗、若値君王、則蹲居恐屈、不異諸臣之禮、日本世俗以爵禪宗大興于世、僅二百年、所以禪家風範、不敢倣庠之法式者也、傳聞大元一統之後、僧家接官之禮太篤、故緇流皆如奴僕、澤山清規云、官員相訪山門、掛牌報衆、探候迎接、將及門鳴樓鐘、衆接入大殿拈香、乃至、若留宿、須上堂致謝、若則別、鳴堂前鐘、集衆送出門云々尋常官員相訪、其禮猶以如此、何況國王大臣乎、我朝縱有相將降臨、不可有大衆迎送之禮也。

九、國師の法嗣

國師は以上述べし如く、一方には帝王初め武臣の崇信を受けつゝ一般の人々を敎化すると共に、一方には法子法孫を敎養する事を忘れなかつた。卽ち「臨川家訓」の中には三等の弟子を說いて曰く

我に三等の弟子有り、所謂猛烈にして諸緣を放捨し、專一に己事を窮明し、是れを上等と爲す。修行不純にして駁雜好學、之を中等と謂ふ。自己己靈の光輝を味はず只佛祖の涎唾を嗜む、此を下等と名く。其心を外書に醉はしむるが如く、文筆を以て業を立つる者、此は是れ剃頭の俗人也、下等と作すに足らず、剃んや飽食安眠、放逸にして時を過す者、之を緇流と云ふ。古人作衣を喚んで飯囊を架す。既に是に僧に非ず、我弟子と稱するを許さず云々。

斯の如く國師の家風は嚴正辛辣であつた。けれども其弟子一萬三千四百四十五人と稱され、中にも禪師號及び國師號を頂いて居る人は拾餘名もある。されば其當時は實に禪宗の黃金時代であつたのである。私は最初國師を評論する考へで研究の歩を進め覺えず讃歎禁ずる能はざるに至つたのである。

一、夢想國師の爲めに之を惜む

上來二章に渉つて、私は覺えず夢想國師の非凡なる修業、偉大なる事蹟を叙述し讃歎した。茲に於て以下少しく冷靜なる批判を加へる必要がある。

我國禪宗史乘の最も重視せざるべからざる鎌倉、室町時代に於て、絢爛花の如かりし夢想國師の生涯も、史的に之を觀察すれば自ら三期に分類することが出來る。即ち第一期は鎌倉幕府に信任せられし事、第二期は後醍醐天皇の御歸依を忝うせる事、第三期に至つて全く南朝の逆臣たる足利尊氏に無二の歸信を受けたる事である。この事實は吾人の解決し能はざる重大問題である。

古來佛教的史家は尊氏が禪に參じたるの故を以て、やゝもすれば尊氏の罪跡を庇護するに非るなきやの言辭を敢てするもの無きに非ずと雖も、吾人は甚しく是を遺憾とする者である。由來僧侶は世事に冷淡にして且つ比較的無邪氣である、それが爲めに佛教を信ずる者、或は寺門の爲めに財施を多くする者はその社會的道德的行動の如

何を省みず、直ちに護法の長者として祭り上げんとするの弊あれ共、こは僧侶の無自覺なる凡情の致す所にして、無邪氣なりとして許すことは出來ないのである。

尊氏は佛教を信じ且つ禪に深く參じた、然しながらそれを以て吾人は尊氏より逆臣の名を冠するを差し控へることは出來ない。逆臣尊氏は永世これを惡まねばならぬ。尊氏は一世の偉傑であつた。確に一流の將軍であり人心を治むるに妙を得た手腕家であつた、勇猛果斷な剛毅な人間であつた、それ等は禪的修養から來て居ることは疑はない、然し彼は其の剛勇なる意氣と機を見て敏なる手腕とを權勢の爲めに惡用して千歳の下逆臣となつた。吾人は常に尊氏を指導したる夢想國師が、尊氏のかの惡逆を救ひ得ず、夢想國師の薫陶は尊氏の逆臣たるの素質を何等改善するに至らざりしことは夢想國師の爲めに之を惜まねばならぬ。

二、解決し得ざる問題

特に國師は後醍醐天皇の恩寵を蒙つたことは一ト通りでない。吾人は當時の歴史を

讀んで、感涙の轉た新なるを禁ずる能はざるものである。

元弘年間、天下麻の如く亂れ、後醍醐天皇は恐れ多くも北條高時のため一時大和國笠置に幸きしたまひ、尋いで又隱岐國に遠流の身とならせたまうた。世に元弘の難といへるもの卽ち是れである。然るに元弘三年五月を以て足利尊氏は京都六波羅の營を破り、新田義貞は鎌倉の本城を亡し、天皇また同月を以て王城に還御したまうた、史家の建武中興と稱するもの卽ち是れである。

後醍醐天皇はかくの如く國家空前の騷亂中なるにも拘はらず、還御の翌月を以て足利尊氏に勅し、夢想招喚の特使を發せしめたまうたではないか、夢想はこゝに第二回の勅命に應じ、倉皇 上京して天顏に咫尺するの光榮を得たのである。天皇は夢想を引見して大に獻ぴたまひ、皇子都督親王の遺邸を以て、革めて靈龜山臨川寺と爲し、之を夢想に與へ、又特に夢想國師の稱號を賜ふた。かくの如きは實に恩寵の極であるといはねばならぬ。然のみならず、其の翌年皇后登遐の時に際し夢想を宮中に留め置き、例の僧供養を爲したまへること二七日。而して又この時天皇例の如く直裁を以て南禪寺再住の勅命を下した、是に由て國師は再び南禪寺に住することゝなつた、天皇御歸依の深かりしこと誠に以て思ひ知るべきである。

然るに是より先き足利尊氏反し、建武三年春、關東より京師に侵入し、天皇また叡山に幸きしたまひ、洛中洛外 再び大騷亂を極むることゝなりし際、夢想この騷亂に乘じ南禪寺を去つて臨川寺に退居した。此の時に當つて足利尊氏は室町に幕府を開いたのであるが、茲に奇怪なるは其の幕府に夢想を迎へて、尊氏自から弟子の禮を執つて其の敎を仰いだことである。爾來尊氏兄弟の夢想を信ぜしこと北條時賴及び時宗の道隆及祖元を信ぜしに勝るべく、又夢想の尊氏を偉人として見ること恰も南光坊天海の德川家康を見るに相似たるものゝありと謂つて差支ない。

先きに後醍醐天皇の恩寵を被むること彼れが如く厚くして、今又北朝の擁立を企てたる南朝の逆臣尊氏を信じ、殆んど彼れと相結託するものあるが如く見ゆるは何故乎

この問題は吾人の解決し能はざるところである。否偉人夢想國師の爲めに吾人は切に之を惜むのである。

三、尊氏の邪智は宗教を利用せしか

然し吾人は大義名分を辨ずる能はざりし夢想國師を責むるに先ち、夢想國師をして大義の觀念を誤らしめたるものは實に尊氏なることを論じて國師の爲めに辯ぜんとするのである。尊氏は實に狡猾なる姦人であつた、尊氏はあれ程の惡逆を縱にしながら、努めて朝敵たるの名を恐れた。尤も朝敵たるを自白せば如何に尊氏なればとてあれ程の大亂は來し得なかつたであらう。故に先づ彼が反旗を飜さんとするに當り、機を先代の亂に得て北條時行を討つの名に借りて鎌倉に下つて居る。而も護良親王を害し奉りし弟直義の罪は一言も之を問はず、鎌倉に根據を堅くし、其の備全く成るや名を義貞征討に托して西上して居る。其の事破れて延元元年（皇紀一九九六）九州に走るや、今川了俊の難、太平記によれば、彼尊氏は足利氏の祖八幡太郎義家は其の遺文に

七代の後に至りて天下は源家の裔の有する所となる旨豫言しあるに、尊氏の祖父家時七代目にして未だその豫言の時到らず北條氏獨り盛なるを以て、家時は己が命を縮めて三代中に必ず天下を取らしめ給へと八幡に祈り遺文して死したが、卽ち尊氏今天下を手裏に收めむとするのであると稱して九州の人心を收めたやうである。此は尊氏自ら今川了俊に語つたとの事であるが、これに依れば以て尊氏の反は實に年來の宿望であつた事を知り、且つ彼が如何に巧言を極めて人心を迷はしたかが窺はれるのである更に又九州に逃れた時は醍醐の三寶院の僧賢俊を惑はし、賢俊の手より光嚴上皇の院宣を手に入れ、義軍と稱して將士を皷舞し、擧兵して居る、これは彼の慣用手段であるが、彼が表面義を稱して無道を擅にせるは吾人が彼の反逆を一層憎む所以である、これに依つて見れば夢想國師も亦彼の僞れる正義の標榜に惑はされたるの一人なるべきを信ずるのである。

四、孰れが正孰れが邪

尊氏の參禪は梅松論によれば、大飲酒の後でも數刻の工夫をして居つたとある、卽ち彼は銳意修養を重ねて居つた、且つ年始の吉書には「天下の政道は私ある可らず、次に生死の根元を早く截斷すべし云々」と書いたさうである。又夢想國師と尊氏は餘程親密であつたやうである、夢想國師は

一、御心强にして、合戰の間身命を捨て給ふべきに臨む御事、度々に及ぶといへども咲を含むて怖畏の色なし。

二、慈悲天性にして人を惡み給ふ事をしり給はず、多く怨敵を寬宥有る事一子のごとし。

三、御心廣大にして、物惜みの氣なし、金銀土石をも平均に思召して、武具御馬以下の物を人々に下し給ひしに、財と人とを御覽じ合はする事なく、御手に任せて取らせ給ひしなり、八月朔日などに諸人の進物、其の數をしらず有りしかども、皆人にくだたまふしほどに、夕に何有りとも覺えずとぞ承もし。

とて「實に末代にはありがたき三體を備へたる將軍」と口を極めて稱揚して居る。こんなありがたき將軍が末代に二度と出られてはたまらぬが、當時の夢想國師は全く尊氏に眩惑せられて或は南朝の正統なることを知り奉らず、北朝を以て正天子と信じ尊氏は至極の忠臣なりと信じて居たらしいのである。尤も一面より見來れば尊氏は夢想國師の云ふ如く慈悲寬厚にして部下を恤むの將軍であつた、もしそれが野心の爲めの慈悲寬厚でなかつたならば尊氏は或は良將であつたかも知れぬ。然し吾人はその慈悲其の寬容は彼が人心を收むる爲めの手段であり、彼の禪的修養は彼の惡逆なる野心を滿すが爲めの具であつたとしたならば、その益々憎むべきを知るのである。只知らぬが佛の夢想國師は實に氣の毒であるが、當時の混亂時代に當つて何れが正統にして何れが義軍なるかの判別を誤り、多くの惑はされたる徒と共に尊氏を信じて居たのは、瞑想して當時に至れば、已むを得ないと云はねばならぬ。

楠正成の信仰に就て

一、當時の情勢と公の見地

足利尊氏の惡逆に反して楠木正成の誠忠は誰知らぬものもないから管々しく述べ立てる必要はないか、大義名分の觀念の衰へた、否、衰へたと云ふよりは尊氏が大義名分を曖昧にしてしまつたのである、卽ち尊氏が自己の野心を達せんが爲めに南朝に對して北朝の天子を擁立し、各々その正統なるを主張したのであるから、人臣はその去就に迷ふたのは當時とすれば無理はないのであるが、その中に立つて正成は敢然として忠勇を宇內に輝かしめた、實に正成は皇國に於ける誠忠の龜鑑であつた。

太平記によれば正成が初めて、後醍醐天皇の天顏に咫尺し奉つた時、「正成一人まだ生きてありと聞こしめされ候はゞ、聖運遂に聞かるべしと思召され候へ」と申し上げて居る、蓋しこれは確かに正成の本意であつたであらう。且つ建武の中興の業は殆ど護良親王と正成の力である、然るに尊氏が內昇殿を許され從四位下に叙せられたるに正成は河內攝津の二國守に任ぜられ從五位下に叙せられたに過ぎぬ。當時の情勢よりすれば、尊氏を比較的重ぜねばならなかつたのは已むを得ずとするも、正成にして若し忠義で固めた偉人ならざりせば、或は尊氏と其の行動を共にせしやも亦保す能はざるものがある。又尊氏が九州から大軍を率ゐて東上した時に於いて、京都の尊氏に對する正成の献策は容れられなかつた、それにも拘はらず從容として奮戰健鬪して湊川に最後の努力を盡して居る、世上正成の湊川の自刄を以て正成の人格を云爲せんとする者無きに非ずと雖、吾人を以て見れば當時に於ける正成の採るべき當然にして且つ至忠の過程であつたのである。

正成の智謀と誠忠は古今其の比を見ない、建武の中興は護良親王と正成の手になり護良親王と正成とを失つて中興の業は破れたのである。而も正成は誠忠の爲めに誠忠を盡して居る、野心や欲望を滿す爲めに義勇を現す者は無きにあらざるも、全く虛心

淡懐、誠忠の外に何にもない、渾身是れ忠。通心是れ義であつたのは正成を措いては古今指を屈するに甚だ少いのである。

二、その信仰の一端

然らば義烈なる正成の信仰方面は何うであつたらう。正成は事を爲すに當つては勿論神社に祈つて居る、太平記によれば元弘三年八月三日正成は神馬三匹を住吉神社に奉献したと記されてある如き卽ちそれである。而して常に正成が信仰したのは觀世音菩薩で、常に讀誦したのは法華經殊に觀音經であつた、正成は元弘元年九月笠置が落城して主上は恐れ多くも北條の兵の爲めに六波羅に移され給ふのやむなきに至りしを聞き、孤軍全く爲すなきを知り、且つ兵糧盡きて如何ともし難きに及び、一度赤坂城を捨て、徐ろに再擧をはからんと決意し、風雨烈しき夜を待つて城兵を悉く逃れさせ城に火を放つて正成一人風雨を衝いて逃れんとして賊軍の侍大將長崎四郎左衛門尉の廐の前を通つた時、番兵に咎められて「何者なれば役所の前を案内も申さず忍んで通るぞ」と誰何された、正成は「これは大將の御内のものにて候が、道を踏み違へて候へ」と云ひ捨てゝ足早に通つたが、番兵達は「曲者だ馬盜人だ射殺せと走り寄つて正成の眞直中を射た、その矢は正成の臂に中つたと思つたが、身には少しの負傷も無つたが後矢の痕を調べると、正成が年來信仰して讀誦した觀音經を入れた守り袋に中つて居たとは太平記の記す所である。又正成自筆の法華經の奥書には

夫法華經者、五時之肝心、一乘之腑臓也。據斯、三世導師以此經爲出世本懐、八部冥衆以此爲護國依憑、就中、本朝一州、圓機純熟、宗廟社稷、護持感應、僧史所載、綽具縑緗。爰正成恭仰朝憲、敵對逆徒之刻天下屬靜謐、心中相協者、毎日於當社寶前可轉讀一品之由、立願先畢、仍新寫一部所果宿念如件 敬白。

建武二年八月廿五日　　從五位上行左衛門少尉兼河内守橘朝臣正成敬白

とある、これ等に依つて正成の信仰の那邊にあつたかは窺ひ知れるのである。

三、公の參禪説に就て

正成の禪的修養に關しては、正成が正行に與へし遺訓狀と云ふものゝ中に、正成が若年より一心に觀法に心を傾けて居つたが、或る時山中に白雲の横るを見て心驚く所があつてから、風雨雷霆等を豫知する氣前の法を得て、旦く休する處があつたが、猶安ぜずして工夫を費す中、ある時南都の春日神社へ參詣した時、その途中で一人の僧が鳩に餌をやるのを見て吟句して去るのに逢つたので、正成は安間七郎に命じて、その僧を呼び返して、先に吟句して居つた所を問ふと、僧は

『道はそれ不明不暗、歴々として玄妙なり』

と云つたので正成は

『如何なるか是れ道』

と云つて質ねた、すると僧は

『天に非ず、地に非ず、佛に非ず、神に非ず鳥獸に非ず、無情に非ず、人事是れ道』

と答へた。正成は更に

『如何なるか是れ人事』

と問へば、僧は

『善に非ず、惡に非ず、行に非ず、法に非ず、卽心是れ正に人事』

と答へた、そこで正成は更に追究して

『如何なるか是れ卽心』

と問ふた、僧は

『君が問ふ心は君が卽心、我が答ふる心は我が卽心、此の心變ぜずんば、一切の觸目總て皆道なり、此の心變じて思となるを凡と名く』

と答へたので、正成は大分合點できたが、まだ不安であつたので

『尙、密義ありや』

と質ねると、僧は「正成」と呼んだので、正成が返事をすると、僧は「是れ何ぞ」と云つた、そこで正成は轄然として大悟したとある。然し此の遺訓狀なるものは頗る怪

しむべきものである。更に又「明極和尚行狀記」の中には建武三年五月二十四日に港川の近くの坂本の醫王山廣嚴寺へ行つて同寺の開山たる明極楚俊和尚を訪ふて「生死交謝の時如何」等の問答があつたとあるが、これは現代歴史家が等しく虚構とするところである「明極和尚行狀記」は僞作であるとの説をなすものが多い、廣嚴寺は正成の戰死以後即ち延元三年に建てられたものであると云ふことである。とも角、正成にも禪的修養があつたであらうとは想像して差支へない、當時は禪風隆盛を極めて武將の殆ど總ては幾分なりとも參禪して居るのであるから、正成にも以上に類する如き參研修養が或は事實あつたかも知れぬが、そは尙幾多史家の研究考證を俟たねばならぬ。併し今茲にその一端を記することも、必ずしも無益の事ではなからうと思ふ。

以下「明極和尚行狀錄」の説を參照して、有名なる楠公決死前日の問答を述べる。

（大日本史料第六編入）

最も「本朝高僧傳」第二十六卷「續群書類集」第二百三十卷等は明極和尚を傳する

に此の逸事かけてなし。山陽の「日本外史」楠氏傳又た此の事を記さず。但「大日本史」第百六十九卷楠公傳の細註に「僧明極行狀、正成軍敗、兄弟共入廣嚴寺自殺姑附備考」といへるのみ。是を以て近來之を僞作となすものであらう。思ふに假令是れ僞作なるも、如上の僞作はよく境機を得たりと謂つて差支ない。こゝに之を擧げて、參考の一助に供せんとするのである。「延寶傳燈錄」四卷は明極和尚行狀錄に依つたものと見える。

四、湊川決死の前日

時は建武三年五月二十四日の事とかや、古來忠臣の龜鑑として絶對の名聲を恣にし、攝津の國には湊川神社とて大なる社殿の中に祭られし、楠正成公が、心盡しの建策も、時の參議藤原清忠の妨ぐる所となつて用ひられず、正成公もはや此の上は一死以て天の時を待つの外なしと、獨り志を決し、一子正行を諭して家に歸らしめ、將來を囑する所あつて、己れは弟正季等と共に、手兵僅に五百を率ゐて、水陸合計五十

萬と稱する足利氏兄弟の大軍に向はんとする時、卽ち決死の前日であつた。楠公は同地廣嚴寺住僧明極和尙（楚俊）に參じた。これぞ所謂英雄の閑日月といふものであらう。時に楠公まづ口を開き、

『生死交謝時如何』

と問うた、もし文字通りにこれを解釋すれば、生と死と交代する時に如何といふ問である。要するに死ぬる時の覺悟を問うたのだ。和尙これに對し、

『兩頭俱截斷一劍倚天寒』

此の答は一寸說明しにくい、文字に拘られてばかり居つては到底意の取れぬところがある。されど全く文字を離れて仕舞つては愈々以て意の存する所を知りやうがない。故にやはり文字に就かざるを得ぬのだ。そこで、試みに文字に就いて之を語るに、兩頭とは生と死とで、生と死とを兩頭と謂つたものだが俱に截斷と出て來たものと見える。畢竟生と死との考へを忘るゝことを截斷と謂つたのである。既に生と死との考へを忘るゝことを截斷と謂つたから、其の截斷の語に乘じて、一劍倚天寒の句が出て來たのだ。

一劍倚天寒とは假令劍を振り上げて見ても、天空には何等の截るべきものもない、故に折角振り上げし劍も空しくもとの鞘にをさめねばならぬ。今も亦其の通り「生死交謝時如何」といふと雖も、元來不生不死にして、生といひ死といふものはないのだ。生死なしとして見れば吾人は無き生死に向つて何等の考へを附して見るべき方法もないではないか、といふべき所を一劍天に倚て寒しと謂つたものである。例の禪家無字の觀念より來る答辯と見ればそれでよいのだ。然るに楠公も解し得なかつたと見えて、更に

『落處作麼生』

と問うた。結局のところはどうなるのかと問うたのである。人として死生の免るべからざるは事實である。然るに其の死生を無きものにせんとは如何にも無理なことでないか。此の場に及んで彼れ此れと六ケ敷ことを謂つては居られぬ。最後の落着き處は

如何と問うたのだ。スルト和尚大喝一聲、天地も震動せんばかりの威勢を振つたと見える

『師震威喝』

と書いてある。此の時の一聲こそ眞に青天霹靂、楠公の如き人と雖き此の一聲には驚いたものと見える、否驚いたにあらず、此の一聲に依つて大悟する所あつたと見える。

由つて次に

『正成起立三拜通身流汗』

如上の問答は卽ち明極和尚と楠公との對話の樣子であるが、流石一代の英雄、萬世の忠臣も生死岸頭の消息は眞に徹底して居られなかつた。それに對する明極和尚の接得は辛辣であり、且つ頗る親切である。楠公も和尚の一喝に依つて心頭一時に脫落の感があつたであらう。この問答の眞僞は前にも述べし如く自ら別問題である、吾人はこれに依つて益することの甚大なるを思はざるを得ぬのである。

大智禪師と菊池武時

大智禪師は曹洞宗の高僧中稀に見る詩文の天才であつて、今日弘く行はる「大智偈頌」は其筆に成りしものである。又南朝の忠臣として西國に旗を擧げ北條氏に反抗したる勇將、菊池武時入道寂阿の歸依僧であつた、否入道は常に師に師事しで、參禪工夫したのである。されば守靜參究の功が著るしかつた。元弘中後醍醐天皇より畏くも菊池、小貳、大友、の三家に綸旨を下し賜ひて探題北條英時を誅戮すべきを以てせられた。所が小貳、大友は卑怯にも變心して北條に昧方せしに拘はらず、菊池武時纔かに五十騎を率ひ、息子武重と共に元弘三年三月十三日に菊池を發し、敵將北條英時が博多に攻め寄せんとするを途中に迎へた。その時、櫛田社の前を打過ぎんとしたれども、如何にしけん馬足を止めて一歩も進まなかつた。すると武時大に怒り、我正義に向つて進前するもの、何ぞ邪神に下馬するの法をなさんや」と、憤然箭をつがえて

武士のやたけ心の一筋に
思ひきるとは神は知らずや

と神社の扉を射た所が、忽にして馬は元の如くに進み出した。流石は大智禪師の爛熟に入つて多年心膽を鍛錬した功が現はれたのである。而して遂に衆寡敵しがたく賊軍の爲めに重圍せられ、花々しく討死をした。死に臨んで嫡子武重を呼びて曰ふに

『汝速かに一度び退陣して時機を見て再擧し、飽まで朝敵を殄滅して震襟を安じ奉れ』

と、武重父の危急を見捨て、如何して獨りオメ〳〵と此場を立退かれうと躊躇せしを、父武重大に怒て

『汝が日頃の思慮に相違したる返答かな、凡そ小信を守りて大義を忘るは良將勇士の辱さる所なり、我は朝家の爲めに命を爰に止む、汝は爰を遁れて節にあたつて命を奉るべし、遲速ありと雖も何れか死を免れんや、時移らん疾く〳〵』

と諫めた。そこで武重も涙の袖を拂ひつゝ遂に其場を立退いた、父入道終に討死したのであつた。勇壯にして忠節、而も再擧を以て嫡子に遺言せる事等は、如何に楠公の櫻井驛の訣別に一如せるか、惜哉楠公は千歳不朽の名を得、三才の童子も知る所なるに拘はらず、入道は世に之を知るもの稀なるは世の史家の眼光あまりに偏頗であつたか、又他に理あるのか、兎も角寂阿入道の誠忠の丹心は參禪の妙趣より發現したものと謂つて敢て誣言ではない。

大德寺開山大燈國師

一、天台より禪門へ

京都の地を踏み來れるものは市の西北の方面に當つて大德寺あることを知らぬ人は恐くあるまい。其の規模の洪大なることは彼の本願寺などの及ぶべくもない。併し本願寺は今となつては實に盛んなものである。人の多く集つてにぎやかなことはいかにも本願寺であるが、寺基設計等の何んとなく偉大なことは今日と雖も本願寺は彼の大

德寺及び妙心寺などに及ばぬと謂つてよい。さて其の大德寺の開山は誰なりしやといふに大燈國師妙超と云へる希世の高僧である。

大燈國師諱は妙超字は宗峯といへる人にして其の生れは播磨國揖西郡である。其の父母嘗て子なきを憂ひ同國書寫山の觀音に祈願して得るところ、俗に所謂「申し子」であつた。生れながらにして肌膚至つて清く、頂骨高く聳え眼光人を射るといふ風であつて、兒童の時より早已に大人の風ありと謂はれた人である。父母これを見て我子の將來に於ける出世を想ひ折角の「申し子」を出家させんとする氣になり、遂に書寫山の戒信律師に我子の出家を託したのである、時に十一歳であつた。

處が書寫山は天台宗である。故に妙超和尚初めは天台宗の僧となりて、この宗義を習つた。然るにどういふものか常に禪宗を慕はしく思ふ心あつて失ぜず、遂に一日慨然として獨り志を決し、住みなれし書寫山を辭して關東に走り、鎌倉の建長寺に入りて時の高僧方に謁せしが、時恰も先きの佛國々師顯日今や鎌倉の萬壽寺に來り住するを聞き、速にその室を訪つて師弟の禮を行ひ、此に初めて天台宗の衣を脱ぎ棄てゝ禪宗の人となり、專念一意坐禪の道に入つて修行せられたのである。時に妙超和尚二十三歳であつた。爾來顯日和尚の座下にあつて、修行して居らるゝ時、一夜或僧の百丈禪師の法語を誦するを聞きつゝありしに、

靈光獨耀迥脫ニ根塵一　體露眞常不拘ニ文字一

の句に至り、自ら圖らずも省る所あつて、早速これを顯日和尚に告げ、其の印可を受けた。しかし未だ眞の徹證といふ所に到達したのではなかつた。

二、辛辣なる大應國師の提撕

既にして彼の大應國師紹明が今や勅命により筑前より來つて京都にありといふことを聞き、即時鎌倉を辭して京都に上り直に大應國師の門を叩き、又弟子の禮を執つて此に其の指導を仰ぎ、朝參暮究大に勉められたのである。時にこの大應國師が大燈國師妙超を以て弟子となすことを得たるは恰も支那の孔子が禮を老子に問ふといふやう

なものである。要するに天下無雙の英雄が天下無雙の英雄を以て弟子にしたのである

嘗て都五條の橋の上にあつて、音に名高い辨慶が、當時牛若丸と稱せし少年なりしも他日一の谷に屋島に又壇の浦にあつて平家の一族を塵殺せる天下無雙の英雄源義經と出合ひて、相互に祕術を盡くしての仕合ひを爲せりとの傳說あるが如き、一大活劇が師弟の間に始りさうな所である。果して師弟相互の間所謂殺人刀活人劍の仕合ひが始つたのである。是れ卽ち禪宗の問答である。されど其見地が優れて居る丈あつて其の問答が餘りに高尙にして、普通の人の分るやうによく之を說くことは至つて困難である。されど妙超の傳として全く之を顧みぬ譯にもゆかぬふら、少しく述べることとする。

或日、大應國師示すに「關」の字を以てせられた。これは雲門の關の字と申して禪門の公案にあつては頗る有名なことであるが、之を要するに關の字に就きて生死の一大問題を考へて見よといふのである。語を換へて之を言はゞ一の關の字を以て宇宙の眞理を悟れといふのである。禪機のない人が聞いては眞に石を含んだやうなもので何等の味も出て來ぬであらう。然るに今や僅にこの關の字を以て哲學的に之を言はば宇宙界の大眞理を考へんとするのである。又宗教的に之を言はゞ生死の大問題を解決せんとするのである。此が禪門に於て文字の說明を離れ、只管坐禪を要する所である。

三、悟後の聖體長養

さて妙超和尙は如何に之を考へしか初め之を受けて頻りに之を考へ色々と說を附して見るものゝどうしても大應國師の許す所とならなかつた。處が後大應國師の鎌倉建長寺に移ることゝなるや、又彼の地に趣きて隨身せしが或時机の上に鑰のあるのを見て、端らずも此に忽然として大悟撤底し、全身汗の流るゝを覺え、早速大應國師の室に趨り往き、自ら聲を勵まして「卽今某與和尙同趣」と告げ、又別に二首の偈を以て所悟を呈出したのであるが、其の一は、

一回透過雲關了。　南北東西活路通。

夕處朝遊沒賓主。　脚頭脚尾起清風。

何の事かさっぱり分らぬ。素人が之を聞ては眞に分らぬのである。處が大應國師は之を見て印可し、大悟撤底の證明を與へられた。時に妙超和尚二十七才であつた。但し此の時大應國師はその證明を與へしも、また妙超和尚の將來に對し大に誡むる所があつた。卽ち左の文を見るべきである。

汝既明投暗合吾不如汝吾宗到洲大興矣只是二十年長養然後使人知有吾證明矣爲妙超禪師書巨福山南浦沼明(判)

之を要するに、汝の悟りは頗る結構であるが之を其の儘に棄てゝ置いてはいかぬぞ己れ悟れりとて直ぐに他の師範たることはよろしくない。少くも是れより今悟れる所に向つて二十年修養することが必要であるとの誡めである。

處で其の後の妙超和尚は如何にせられしやといふに、大應國師は其の年の十二月廿九日を以て此の世を去られたのである。そこで妙超は鎌倉を辭し、京都に出て、東山

に雲居菴といへる一小菴を結び、二三の同輩と共に最もわびしき暮らしをなし、あらゆる艱苦と戰いて坐禪修行に怠ることなく、此の外には更に何等の余念も無かつたのである。之を悟後の長養と稱す、後に一休和尚が吟じて、

挑起大燈輝一天。　鑾輿競譽法堂前。

風喰水宿無人記。　五條橋邊二十年。

と吟ぜしは實に東山雲居菴に於ける大燈國師二十年の修行を吟じたのである。後醍醐天皇の賜はりし詩の中にも「二十年來辛苦人」といふ句あるは此の事實を詠じたまひしものである。

凡そ人克く屈する者は又克く伸る者である、一度よく屈するものにあらざればよく伸るものではない。若し克く伸るものなれば必ず克く屈するものであるといふことを妙超和尚に就いて認むることが出來る。卽ち妙超和尚が大應國師の遺訓をよく守り、二十年の久しき間、謂ゆる風喰水宿の苦行を敢て苦行とせず、眞に乞食の生活を甘ん

じてよく之を爲し遂げたのは實に克く屈する者である。然るに二十年目の喜曆元年四月八日となるや、洛北紫野の地に大伽藍を造營し、之を龍寶山大德寺と號し、而も勅命を奉して朝野の縉士之に迎へ、其の開堂式を行つたのである。而も其の大德寺は數年の後には五山の一に加へられしのみならず、遂に南禪に準じ五山の上刹に位することになつたのである。語を換へて之を言へば日本一の禪刹になつたと謂つてよい、

四、生前國師號の宣下

之を要するに妙超和尙は二十三にして佛國國師顯日の門に入り、尋て大應國師紹明の門に入つて修行し、二十七才を以て大事を究むるに至りしものなれば、僅かに五年を以て見性大悟の目的を遂げたのであるから非常の速成といはねばならぬ。蓋し是れ非凡の天才の然らしむる所である。然るに彼れは更にまた悟後の長養として滿二十年の修行をつとめたものである。

妙超和尙が東山の草庵より紫野の大德寺に移りしは果して喜曆元年なりしや、又それよりも遙か以前なりしや此れ歷史上の問題である。思ふに移轉はズット前にして公然開堂式を擧行し自ら寺の住職として師家の任に當ることゝなりしは喜曆元年である。それまでは紫野大德寺の門前常に市をなすが如く多數の禪客の訪問ありしも自らは菴主と稱し住持の名を擧げなかつた。卽ち師家の任に當らなかつたのである。蓋し二十年長養の師訓を奉じ、之を空しくせざらんがためであつた。師命を重ずることの此に至れるは誠に感ずべきの極みではあるまいか。

時に大德寺は誰の力で出來たのかといふに妙超和尙の人德によつて出來たことは固より言ふまでもないことである。されど其の大檀越となれるものは播磨國の赤松則村（圓心居士）と後醍醐天皇である。妙超和尙は赤松則村の甥にして血族上離るべからざる關係あり、之に依て初て赤松則村が若干の御金を出し、紫野に地處を求めて一宇を造り、之を妙超和尙に與へしが大德寺成立の起原である。而して後妙超の人德が世に聞ゆると共に、又天聽に達し花園上皇及び後醍醐天皇の御歸依斜ならざることゝ相成り、數

々參内して上皇及天皇に對し奉りて法を說くの光榮を擔ひ、終に花園上皇よりは、「大燈國師」の稱號を賜り、後醍醐天皇よりは「正燈國師」の稱號を賜つたのである國師號宣下の恩賜は聖一國師に始まると雖も、其の人の生前に賜はりしことは、この妙超和尙が最初であるかのやうに思はる。建武四年十月二十二日、生壽五十六歲を以て此の世を去られた。多くの高僧中意外に短命なりしは誠に惜むべきの至りである。

妙心寺開山關山國師

一、鎌倉より大德寺へ

京都府花園に在つて、壯大な堂塔伽藍は整々相望み、洛西第一の壯觀を保つてゐるのは正法山妙心寺である。謂ふまでもなく臨濟宗妙心寺派の大本山であつて、同宗十三派七千有餘ケ寺の內其過半數を占め、同宗の重鎭をなすものは妙心寺である。寺は花園上皇の勅願に依り關山國師の開基にかゝるものであるが、今の玉鳳院は當時上皇の花園に在る離宮を改めて梵刹としたものであると云ふ。應永六年足利義滿の怒に觸れて寺領を沒收せられ、應仁の兵火に逢うては全山烏有に歸する等、幾多の波瀾ありしと雖も、今尙ほ輪奐の美を誇るもの、蓋し關山國師の偉德と謂はざるを得ない。

關山國師諱は慧玄、彼は如何にして花園上皇の御歸依を忝うし、彼の妙心寺の開山たるに至りしかと云ふに、一言にして之を云へば、卽ち修養の結果である。而も其の修養は二十年や三十年のことでない。凡そ四五十年間而も餘人に比類なき修養を繼續せられた結果である。卽ち左の傳に就いて之を知らなければならぬ。

關山國師は信濃國高梨高家の孫である。幼年の頃より何となく氣高いところ又小事に心を寄せざるところなど、どうも尋常の器とは思はれぬといふ所よりして、其の父は愛子を僧となし世の導師たらしめんとする氣になり。相携へて相模國鎌倉の建長寺に臻り高嚴和尙に托し吾子を出家せしめたのである。其の年齡何歲なりしや傳記の上

に之を記してない。父に連れられて來たところより之を觀れば子供の時であつたといふこと丈は慥である。

さて關山和尚出家以後數十年間、誰に就きどういふ風に學を修め、また行を習はれしや、鎌倉に出家して後、大燈國師妙超の門に入らるゝ迄の經路は不明である。惟ふに建長寺や圓覺寺にあつて群僧の中に交はることを爲さず、どこか別の處に菴を結び獨り坐禪して居られたのではあるまいかと思ふ。卽ち關山は始め鎌倉に在つて自身の氣に入つた是れぞと思ふよき師匠を得ず、又志の合する善友も乏いので、獨り別所に坐禪して居られたのではあるまいかと思はれるのである。

二、眞に是れ雲門の再來

處が悟りは容易に開けぬ、未だ安心の域に到り兼て居るところよりして或年建長寺の開山忌に出席し、多數同列の人に對し、天下何人か眞の善知識なりやと尋ねられしに、一人の僧あり現時眞の善知識として賴むべき人は大燈國師妙超である、天下人多しと雖も妙超に勝る人あるべからずといふことを知らしてくれたので、關山和尚は喜び勇み、卽日鎌倉を辭して京都に上り、紫野大德寺に到つて大燈國師妙超に見え、言葉他事を雜えずして、イキナリ、

『如何なるか是れ宗門向上の事』

と問ひかけた。卽ち「禪宗の極意は如何」和尚知つて居るなら一言之を聞かせよといふ意味の問であつた。時に大燈國師此の問に應じ大いに聲を張りあげ唯一言「關」と謂つたばかりであつた。（これ大應國師が大燈國師を接する時と同じく雲門禪師に倣つたのである）關山之を聽いて何ともいはず無言にて匆匆衣の袖を抱へ其の所を去つたといふ。蓋し關山この初對面の時に於ける大燈國師の手際に驚き、眞の善知識は是の人なりといふことが直ぐに分つたからであらうと思ふ。大燈國師もまた關山の進退につき餘程感心したものと見えて、關山の出てゆく後を眺め、

『作家禪客天然有在』

と謂つて居る。さて其の翌日になると關山改めて大德寺に來り掛搭を乞うた。時に大燈國師は侍僧をして「若し掛搭せんと欲せば誰かの紹介を持ち來れ」と謂はしめた。スルト關山曰く「夫れ善知識は金剛の正眼を具すべし、學人來つて僅に門を跨ぐるあれば已は其の心肝を徹見すべし、什麼の紹介を要せんや」と。大燈國師此の語を聽き直ぐ掛搭を許したとの事である。關山國師の氣宇卽ちその人と爲りの違つて居るところ此に於て粗々想察することが出來る。

時に關山は元より並の人ではない、頓機俊發とて何事も早く分り而も至つて領解のよい性質の人であつたから、禪の悟りもまた早かつたと見える。卽ち先きに大燈國師の謂つた「關」の字に就きて思惟工夫を凝らし、遂に一夜この關の字よりして大悟徹底するに到り、早速方丈に趨り、所悟を告ぐる所ありしに、大燈國師の喜び一方ならず「汝は雲門の再來なるべし、よく雲門の關の字に透徹する所あり」とて此に關山の號を授けられた。

關山和尙已にかくの如く大悟徹底し、師匠の賞讃を忝うするまでに至りしも、尙ほ修養の必要ありとて大燈國師一日法語を付し、其の將來を警告せられたことがある時は元德二年にして關山和尙五十四歲の春であつた。

三、細民の奴僕より離宮へ

この警告を受けし關山は早速大德寺を辭して美濃の伊深山に隱れ、一何人と雖も知ることなからしめたのである。傳ふる所によれば、此の間晝は出でゝ細民の奴僕となりて農事を助け、夜は草菴に歸りて坐禪工夫に餘念なかつたといふことである。今正眼寺と稱するものは卽ちこの遺跡である。

然るに此に臨時の出來事が起つた。他にあらず大燈國師の遷化である。時は延元二年の冬であつたが、大燈國師の病革るや、花園上皇特使を大德寺に遣はしたまひ、「和尙滅後朕は誰に向つて法を問ふべきや多くの弟子中殊に越格の者あらば之を知らせよ」と宣べたまへるに對し、大燈國師は之に復奏するに「諸弟子中我が骨髓を得た

るものは獨り關山慧眼あるのみ、然るに彼尙坂修行中にして住處定かならず宜く天下に號令して之を探ね出し彼に御諮詢あつて然るべき」旨を以てしたのである。これ實に妙心寺の出來る濫觴にして又上皇が關山を信じたまへる始めであつた。

既にして大燈國師の遷化と同時に、花園上皇使者を四方に遣し以て關山の所在を搜らしめたまひしに、一人の使者漸く美濃國に到り伊深山に一人奇僧あることを聞き出し、心竊かに是れぞ探ねる目的の關山なるべしと思ひ、早速其の菴室に就きて委く事の由を陳ぶるに、初めは容易に應諾する風も見えざりしが、尋いで大燈國師遷化の事を陳べ、勅命の由つて來る本は大燈國師の遺命にある事實を告ぐるに至つて、終に詔命を奉ずることとなり、早速其の勅使と同道して上京し、花園の離宮に於て上皇に拜謁の光榮を得たのである。時に關山六十一歳。

上皇見て大いに悅びたまひ、遂に花園の離宮を改めて寺となし、之を正法山妙心寺と號し、關山を以て其の開山第一祖として之に住せしめたまひ、上皇自身は方丈の後ろに當つて玉鳳院といふ小菴を造らせられ、此に御駐輦あつて關山を師と賴み、朝夕參禪したまふたのである。これぞ實に妙心寺創立の來歷である。

昨日までは美濃の伊深村にあつて農夫の手傳などして居た者が、今日は上皇の御招きに應じ而も上皇の離宮を以て吾が住處と爲し、尙ほ上皇の御師範をつとめ奉るといふことは眞に異例中の異例である。此の異例こそ實に今日の妙心寺ある所以である。しかしながら關山和尙が一朝にしてかくの如く光榮を擔へるものは只事ではない、六十一年間の修養があつた爲である。よし六十一年はかゝらなかつたとしても嘗て鎌倉の建長寺に抵り出家の身となつてより、後は常に辛參苦修に餘念なかつたに相違ない特に大燈國師の室內に入つて已に大事を極め了れる後の修養、卽ち美濃伊深山にあつての修行は又別段である。

四、貧富苦樂を超越す

實に此の關山和尙は非凡な人であつた。世に禪僧風といはるゝ人があるなら此の人

こそ禪僧の代表となるべき人であらう。今其の人の逸事として傳ふるもの二三を擧げんに、信州の高梨氏は既に關山の生家である。由て或時尋ね來り家の漸く破損し雨の漏る所などあるを見て、侍者は高梨氏に對つて何うして之を直さんのか、費用の點に至つては私が支辨して置きませうといへるを關山傍にあつて之を聞き罵つて曰はく「此の俗漢來つて相見すれば足れり、我家の事を管してどうするのか」と以て其の人と爲りを察すべきである。卽ち貧は一般俗人の見て苦となす所なるを、關山其の人にあつては却て之を樂となす所であつた。嘗て一介の道人として樹下石上に閑居せし其の時も後日帝王の尊敬を忝うするに至りし其の時も、終始一貫して變ることなく關山和尙の室內には唯兩朝花園上皇後醍醐天皇の震奎一篋あるのみ、何等の器具をも置かなかつたとの事である。

斯くして關山和尙は延文五年二月十二日、天壽八十四歲を以て遷化せられたが、後奈良天皇の時に至り、本有圓成國師の號を宣下あり、尋いで後西院、東山、桃園、光格、孝明の五朝よりして佛心普照、大定聖應、光德勝妙、自性天眞、放無量光の國師號加諡になつた。更に又明治天皇よりは特に無相大師の諡號を賜つて其の法燈益〻榮え來り、元龜天皇以後日本の臨濟宗はこの關山系の人で持つことになつて居る。夢想系の法燈は僅かに二三代で消滅したが、關山系の法燈は德川三百年を照して尙ほ滅せず、明治年間に及んで尙ほ光を放つて居る。

剛健無二の大光國師

大光國師諱は鏡圓、自ら通翁と稱し、一名淨光とも謂つた。其の生地幷に俗姓は不明であるが、早き頃より出家し其の志至つて堅く、而も聰明なること又尋常なゞざりしが、初の間は儒敎を學び、又佛敎に就きては一般の經論を研究して居た。

然るに一朝自ら感ずる所あつて志を禪道に傾け、これまで學びし事を悉く棄て禪宗に歸し、下野國那須の雲巖寺に到り佛國國師顯日を禮して弟子となり、朝暮心を

一に坐禪の道に寄せ大に勉強せられしも未だ大悟徹底といふ場に至らぬので、終に雲巖寺を辭し所謂「千里の道も遠しとせず」の志よりして、大應國師紹明を遠く筑前國橫嶽山の崇福寺に拜する爲めに、彼の地に赴かれたのである。

然るに禪宗に謂ゆる大悟徹底といふことは眞に容易ならざる業である。故に鏡圓和尙は筑前に至り大應國師に參ぜしも尙ほ大悟徹證と云ふには到らなかつた。併しながら若し我が意志强固なれば必ずしも其の事が成就せぬといふ譯のものでもない。

鏡圓和尙一度、禪門に志を傾くるや初め下野那須山に到ること前後十七回、橫嶽に上ること合して十八回と謂つてある、唯那須と橫嶽との二箇處のみならず、又其の他の善知識も多く之を尋ね去つて參究する所ありしも、尙ほ大事究明の所に到らざりしが、一日僧あり屋上の松を指し「一切の草木は皆大地を緣として生ず、彼獨り何を以て緣となすや」といふに對し、傍に侍りし一人の僧これに答へて「無緣を以て緣と爲す」といふや鏡圓和尙之を聞いて忽然大悟し、覺えず失笑し趣つて大應國師の處に到り、所見を呈して、こゝに初めて印可を得ることになつた。卽ち大事を究明するに到つたのである。

時に鏡圓和尙が遂にこの大事究明の場に到達せしは何年の頃なりしや傳の之を知るべきものはない。されど三百五十里もある遠距離の間を十七回若しくば十八回往復するには少くとも二三十年間の歲月を消費せしは固より無論である。

爾來、花園天皇の御信用を忝うし、又後醍醐天皇の恩顧を蒙つて南禪寺に住し、時々御召しに應じて參內し、數々敎法の御諮詢に預り、ために普照大光國師の號を賜つたのであるが、それよりも鏡圓和尙の傳として千歲不磨の偉勳となすべきものは元享の宗論である。

日本の佛敎史上應和の宗論といふのは叡山と南都との間に起る論議にして史上著名の出來事であるが、要するにあれは時の天台宗と法相宗との間に於ける敎理上の問答であつた。今元享の宗論といふのは、元享の初際禪宗の漸く盛んなるを嫉視し之を妨げ

んとする意よりして、叡山南都等の諸寺所謂彼の時の八宗の諸寺諸山擧つて時の朝廷に向ひ、禪宗排斥の運動を試みたのである。そこで元享四年正月二十日を以て八宗の學者を清涼殿に召し、禪宗の是非邪正を論決せしむる事になつたのである。さてこの時に當り勅命を以て禪宗の側より人選せられしものは大光國師鏡圓と、大燈國師妙超の二人であつた。而も鏡圓は妙超の法兄にして遙に先輩である。妙超和尚は未だ大德寺を開かざる前のことなれば鏡圓和尚の侍者として其の席に列することになつたのである。其の議論は七日間であつたが、議論の勝利は鏡圓和尚に歸したので時の陛下また大に皇情を慰めたまひ、群臣また同じく之を悅賀せしも鏡圓和尚は七日間の論議を終へ歸らんとするの途中病を發し終に不歸の客となつた。時は元享四年正月二十七日生壽六十八歳であつた。（拙著「禪門佳話」參照）

總持寺開山常濟大師

一、六歳に既に求道の志あり

今から六百五十年前龜山天皇の文永五年の頃、世は鎌倉の全盛を極めたる時代、執權北條時宗が蒙古から來た忽必烈の使者を逐ひ返したのは、丁度其年の二月頃であつた。國難切迫、人心恟々たるの時、わが常濟大師は其年の十一月二十一日、越前多禰の莊瓜生氏に呱々の聲を擧げ玉ふたのである。大師のお生れになる以前、兩親は子供のなき事を歎かれ、御信仰の厚かつた多禰の觀世音菩薩に御祈願を籠められ、而して誕生遊ばされたのが大師である。隨つて幼少の時より常に他の兒童と異り、朝夕母御の御誦みになる法華經の眞似讀みをさへなされたと云ふ事である。既に六歳の御時、一日母御に伴はれて觀世音に參拜し、熟々菩薩の御像を御覽になつて

『此菩薩はいづこの方で、如何なる善い業をなされて、斯くも多くの人々よりお拜まれになるのでせうか』

と云ふお尋ね、母御は之に答へて、

『されば観世音菩薩は、お經文にある如く、弘誓の深き事海の如しと、多くの人々を救はんがために難行苦行の功を積み、慈悲方便を垂れて德を累ねし、其功德によるものぞ』

と説明遊ばされた。この一言が深くも幼き大師の胸底に刻まれ早くも出家得度の大志を發されたのである。されば大師の御生誕も觀音の功德であり、御出家の動機も觀世音である。實に今を距ること約六百五十年以前の事である。

宿緣開發の然らしむる所か、一度萠せる出家求道の志は如何なる手段を以てしても止まる譯のものではない愈々八歳の春、孤雲懐奘禪師を師匠と頼み、程近き所ながら、山路を踏み分けて永平寺に連れ登り行く、兩親の心の中はさこそと思ひ遣られると同時に暖き父母の膝下を離れて、あの草深い山寺に沙彌となつて修行を續けられた大師の發願の尋常底ならざりしは勿論の事である。然るに不幸にも懐奘禪師の御逝去に逢ひし後は徹通義介禪師を師として御修養遊ばされた。御歳十八にして四方行脚の途に就き、師を尋ね道を訪ふて、具さに辛苦を嘗めさせらるゝ事前後十ヶ年、永仁二年十月二十日徹通禪師上堂に方り

『平常心是道』

の提示により轄然として大悟遊ばされ、

『我會せり』

と絶叫された。この平常心是れ道の一事こそ人生修養の根本眼目であらねばならぬ。又吾人の理想とする所もこの一事に外ならぬのである。

二、喫茶喫飯の活佛教

精神修養と謂ひ宗教信仰と謂ふ。夫等の事柄が若しも吾人の日常生活と沒交渉のものならば、この忙しき世に處して一顧の價値だもなき閑家具と謂はねばならぬ。世間兎もすれば高處にのみ着眼することを知つて、自己の手足の之に伴はざるものが多い。其理は如何に高尚深遠たりと雖も、之を卑近に實行し得る處に於て、初めて修養

の意味を徹底するのである。今、常濟大師が徹通禪師の提示によりて悟得せられたる「平常心是道」の話の出所は、支那禪門の高僧たる趙州從諗禪師が其師南泉普願禪師に參ぜられし時、

『如何なるか是道』

と問はれた、南泉禪師答へて曰はく

『平常心是道』

道は吾人の平常心にある、人生を離れ、社會を離れ、家庭を離れ、個人を離れて道の存する譯はない。この一則の公案を聞いて合點せられたる常濟大師の見地は推して知るべきではあるまいか。

然るに師の徹通禪師は容易に印可せられなかつた。

『儞作麼生か會す』

如何悟つたかと反問された。時に常濟大師は直ちに

『黒漆の崑崙夜裡に走る』

と、之は説明の限りではないが、文字の上では眞黒な漆玉が暗夜を走つた——何の事やら分らぬが、不知最も親切で

一口に飲みたる水の冷たさを

人の問ふとも如何答へん

で、一杯の水の味と云つても言語文字に現せる譯のものではない。況して妄心立命底の一大事修行の眼目を道破したる大師は斯く言はるゝより外になかつたのである。師は更に徹悃の情を垂れ、

『未在更に道へ』

と仰せられた。間一髪を容れず、大師は

『茶に逢うては茶を喫し、飯に逢うては飯を喫す』

と之れが平常心是道の脱體現成である。喫茶喫飯常住坐臥、一擧手一投足の上が直ち

に道である。道は客觀的に眺めて居るものでもなければ、亦主觀的に自己のみを尊重する性質のものでもない。主觀と客觀と圓融無碍、自己と大道と同體一枚になつて初めて左轉右轉共に大道の現成とならねばならぬのである。されば中庸にも、『道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらず、此故に君子は其見ざる所を戒愼し其聞かざる所を恐懼す』とある。既に大道と一枚になつた以上は、離れんとして離る可きものではない、人が見て居やうが居まいが、聞いて居やうが居まいが、他の見聞覺知によつて左右せられざる確固不動の大信念、これ卽ち大道と一如になつた境涯である。

三、日々是好日底の消息

常濟大師一代の御事蹟は悉くこの「平常心是道」の現成に外ならない。されば之當時鎌倉全盛の時代なりしに拘らず、北條家に近親して自己の勢名を求めやうともせられなかつた。京に上つて堂塔伽藍を建立せやうとも遊ばされなかつた。御醍醐天皇の御歸依厚かりしも、禁廷を窺つて自宗を皷揚せんとするが如き野心もなかつた。

只偏へに能州の一角に在つて兀々として斯道を辿られたに過ぎぬ。卽ち茶に逢うては茶、飯に逢うては飯を喫する、平凡の御生涯中、佛の威儀を實現し、祖師の行持を嚴修し、佛敎の生命を保任し、修養の極致を體現せられたのである。これが直ちに國家を扶護し社會を救濟し給ふ所以であつて、今日の如く曹洞宗が門葉日を追うて昌んになりつゝあるのも、其根源は多く常濟大師の喫茶喫飯底の平凡なる行持に依る所と謂はねばならぬのである。

今日の人々は自己の財產、權勢、地位、名望を得んが爲めには如何なる惡戰苦鬪をも辭せぬと云ふ勇氣がある。けれども其根柢たるべき自己を究明して、眞に百代の師範たるべき人格者がない、死して滅びざる生命、永遠不朽の大道と同體一如になつて初めて火に入れても燒けず、水に入れても溺れざる吾人の理想、眞善美の三要素を具備して活社會に處する事を得るに至るのである。大師のお言葉に「人々悉く道器なり、日々これ好日なり」とある。日々是れ好日底の消息を味ひ得たる事ならば、身

の貴賤貧富を論ぜず、單に自己の幸福たるに止まらず、これを家庭に處しては一家が正しくなり、之を社會に處しては社會が正しくなる。茲に於て六百五十年前の常濟大師の宗風が、大正の今日活潑々地と現成するに至る、之を現成せしむると否とは偏に吾等の志の如何に依るのである。

四、眞實の佛法如何

正安元年三十二歳の冬、加賀大乘寺に到り、師儀价和尚に代りて衆を接し、三十五年乾元元年、大乘寺に師席を繼ぎ四十四歳助賀淨住寺の開祖となり、能州酒井保に永光寺を建立されたのは、正和元年四十六歳であつて、五十四歳元享元年四月五十四歳の御時、能登櫛比の諸嶽寺に入り、律院を禪林となし、之を改めて總持寺となされたのである。故に師と共に大乘寺に十年、永光寺に十年と云ふことになるが、其間も阿波や肥後に行かれたことがあり、又永光、淨生、光孝の諸寺を巡錫せられ、所謂る席暖まる暇がなかつた樣である。故に元享四年、五十七歳、總持寺を峩山に讓り、自らは永光寺へ隱退された前後三年といふものが、大師は眞の佛法を傳へん爲に靜寂な生活をされた時間である。唯一人の大法皷揚の弟子を得ん爲めに山奥に居た人である。故に大師の生涯は飾らんにも華々しいものがない。平常心是道とは喫茶喫飯である、此處か大師の偉大なる所以、尊貴なる理由である。

眞實に偉大なる人は、世に謳はれる人よりも、寧ろ隱れてる人に多い。人民の健全な分子は常に世相に現れることの無い階級に屬する。斯の如き人がなくなる時は、一國の安危に關するのである。名けて之を「椽の下の力持ち」といふ。孔子は堯舜の世に現實に見んと欲して、一代奔走した、然も當時の人より「累々乎として喪家の犬の如し」と嘲けられた。支那の春秋年千歳、笑はれた孔子の道は不易である。釋迦も尙「小國の王子政治を知らず、何ぞ宗教を說かん」と罵倒されたのである。道元和尙、瑩山和尙、共に越前と能登の山奥に、西來の祖道を傳へ、自ら閑田地を耕やし、眞の佛法を傳へる人を俟つて、綿密の行持を以て眞實の佛法を布かれたのである。然るに

今は一萬四千箇寺の末寺ありと云ひ乍ら、僅かに葬式屋を以て職業とするに止まらば甚だ兩祖の本意に戻るものと謂はねばならぬ、大師は當に今日の總持寺を開かんことを望まれた人に非ずして、正傳の佛法皷揚の法孫を得んことにあつた。大師は華々しい活動を期せられずして、道元禪師の道を其儘傳へられた人なることを切實に感ぜざるを得ぬのである。

活埋竅を掘つた通幻禪師

一、非凡なる其生涯

曹洞中世の偉傑として、今尚其名を聞いてすら、乍入叢林の雲衲は慄え上る位の通幻寂靈禪師は豐後國國東郡藏郷に生れた。初め其母嗣なきを歎いて佛塔寺院に詣でて聖者を獲んことを祈つた。然るに不思議なる哉、ある夜、梵僧が金盂を授くと夢みてやがて姙娠した。既にして將に分娩の紐を解かんとして、果敢なくも母は黄泉の旅に趣いたのである。父親の落膽悲嘆如何ばかり、涙片手に古廟の側に葬つた。然るにその後通行の人がかの廟側にさしかゝると、怪しや嬰兒の泣聲が聞えた。驚き走つて傍人に話したので、終に父親にも傳つた。父親は直に壙を開いて見ると、玉の如き男子が生れて居つた。その男子が卽ち師である。生誕の有樣から既に非凡であつた。

父親は驚き且つ喜んで、卽ち懷歸つて產湯に浸けて見ると、氣體芳潔にして何となく凡物と異る相を具して居る。占相者が之を觀て驚嘆していふには、「此兒は凡流でない、法器である、右語に人聖子を產めば、其母歿すといふことがある、必ず我言を疑ふな」と。此豫言は虛妄でなかつた、師は幼年の時からよく書を讀み、數年の間に博く經史に通曉し、遊戲に耽り易い年頃でありながら、俗に混ずるに甘んぜず、十七歳の時、故郷の大光寺に赴き、定山和尚によつて剃髮し、翌年、太宰府の戒壇に登つて大僧となつた。

二、道の爲めに身命を賭す

曆應三年志を決して遠く加賀に遊び、錫を大乘寺に掛けた。時に明峰禪師が席に據つて居られたので、師は朝鍛夕錬脇が席に着かぬ程力參した。されば一山の衆僧咸師を推賞して、精進童と呼んだ。文和元年の春、總持寺の峩山禪師の道風高尚なるを聞き、遂に往いて禮謁した、禪師一見して其器を重んじ、命じて侍司に居せしめられた。一日禪師が身心脫落の話を擧するを聞いて、忽然大悟し、「我會せり」と放言したので、問答が始つた。

山曰「汝作麼生會」師曰「和尙莫瞞人好」

山曰「身心脫落時如何」師曰「倒騎佛殿出山門」

山曰「莫亂走」師曰「羅籠不住、呼喚不回拂袖便去」

峩山禪師は微笑せられた。後禪師は更に古人節用講訛の處を以て一一質問を發せられたが、師の答對は流るゝ如くであつたので、禪師は衣法を授けられた。時に年三十五應安元年總持寺に出世し、懷香を峩山禪師に供したが居ること幾もなくして退位した。三年武藏守細川頼之が丹波の永澤寺を創立し、師を請じて開山始祖とした。その時師は學人共が徒に文字葛藤のために遮られて、遂に道を見ること能はざるを憂へ一切の文字を禁絶し、五日毎に一回堂内を搜つて、凡そ文字（書籍）を見れば、卽座に燒き盡した。又僧堂の前に活埋窟を掘つて、新到者がある毎にその所參を試みて、契當せざるものがあると、輙ちその中に撞入した。是に於て四方の身を喪しても法の爲めにせんと欲するものが雲霞の如く聚來した。

三、沙を陶り金を揀ぶ

後圓融天皇師の法化を聞召して、欽尙を加へ給ひ、特に敕黃を賜うて天下の僧錄に命じ給うた。是より洞上の宗風大に世に扇がるゝに至つた。

永德二年詔を奉じて總持寺に住持した。至德三年越前の守護代朝倉高景龍泉寺を建て、師を延いて第一世とした。さて峩山禪師の法嗣は二十五人あつたが、その滅後に至つて遺誡に違ふものが夥しかつた中に、師は獨り沙を陶り金を揀び、邪を摧き正

に歸し、唯十一人を留めて、餘は悉く擯斥し去つた。その嚴令は常にこの通りであつた。明德二年四月疾を示したので、垂誡して曰はく。

我滅後、汝等諸人當「屏」息諸緣「究」明一大事「俾」洞上玄風不「墜」於地「若今」貪「著文字言句」非「吾徒」也。

と、いよ〳〵危篤に陷つた時、師も自覺して「時至れり、吾行かん」と遺偈を書して示寂した。時に壽七十、法臘五十二。（以上聯燈錄取意）

以上述べ來つた如く、活埋猿の接得に至りては、古今に卓絕して最も惡辣極まる手段で、實に勇士が戰場に臨めるが如く、轉戰慄に堪えないものがある。乍併これは非常に親切徹悃一片から流露した大慈悲の行持なることを領得し、洞上の學人庶幾くは正師を得て、通幻禪師と相見せんことを祈る次第である。

通幻下の偉僧石屋和尚

若し數を以て其勢力を計るものとするならば、今日の佛敎各宗中に於て、眞宗を第一位に推さねばならぬ。それに次いでは曹洞宗であるが、開山道元禪師は前にも述べし如く、越前の山中永平寺に於て、一箇半箇を濟度することを以て其宗風とし、他の高僧の如く傳道、宣傳等に從事しなかつた丈其基礎は堅實であつたと云へる。隨つて當時に於ては北國の一部に其宗風が行はれたに過ぎなかつた。然るに禪師に次いで孤雲、徹通、瑩山、峩山等の高德が順次輩出するに至りて、漸く其勢力は北陸一帶に行き亘つたのである。併しながら未だ關東、關西、中國、四國、九州方面には弘通しなかつたが、峩山和尚の下に通幻寂靈和尚出で、通幻の下には十哲と稱さるゝ誠に立派な高僧が一時に揃つて出た結果、禪風忽ちに天下を風靡するに至つた。

但し通幻門下に立派な人が澤山に揃つて出たとはいふものゝ其の中に東西の大關とも謂つべき拔群の高僧が二人あつた。其の一人が了菴慧明和尚で、他の一人は石尾和尚である。了菴和尚は今現に人の多く參詣する相州小田原なる大雄山最乘寺の開山で

ある。關東八州より奥羽地方の曹洞宗は多くこの了菴和尚及び其の門流の人によつて弘つた。さて今一人の石屋和尚は薩州鹿兒島なる玉龍山福昌寺の開山である。京都以西の曹洞宗、卽ち山陰山陽及び九州地方の同宗は多くこの石屋和尚及び其の門流の人によつて開けたものである。而して今は石屋和尚のことに就いて、記述して見たいと思ふ。

石屋は號にして其の本名は眞梁と稱し薩摩國島津忠國公の子である。彼の一休和尚の如く皇族の出ではないが、堂々たる華胄の家に生れた人であつた。然るに如何なる因緣にや六歳にして其の處の廣濟寺に入つて童役を執り、十五歳にして京都に出て南禪寺の蒙山和尚を拜して出家得度の式を行ひ、是より眞個僧の形に改められたのである。其の形を改めて僧と爲ると共に、又其の心を改めて眞の僧たらしめんがため、まづ蒙山和尚の下にあつて修養するも、未だ眞に安心を得ることが出來ぬので、一時南禪寺を辭し、西雲寺に往きて東陵和尚に從ひ、建仁寺に於て中巖和尚に參じ、更に江

州の永源寺に寂室和尚を拜し、又轉じて泉州の高瀨に利り、古劍和尚に見え、又南禪寺に還りて此山和尚に從つた。かくの如く多數の明師指導の下にあつて精神の修養に晝夜勉勵するも、未だ安慰の處に到達することが出來なかつた。

そこで今度は筑前の志賀島並に丹後の九世度に往き、彼の地に安置する所の文殊に祈誓し、文殊指導の下に精神上の一大問題を決せんとしたのであるが、其内に通幻和尚、今や丹波國笹山の永澤寺にあり、四來の雲衲日を追うて盛んなるを聞き、遂に彼の處に參ずることゝなつた。然るに此通幻の門庭その嶮岐なること、尋常一樣ならず、活埋鉄を掘つて怠惰の者を誡めて居た事は前章に述べし如くである。

卽ち一日笈を負うて永源寺に參ずるや、通幻既に之を知り門を堅く閉して入らしめなかつた。故に止むを得ず、退きて其の翌日參ぜしに又同じく門を閉ぢて入ることを許さず、かくの如くすること十二回に及んだのである。一度や二度のことは古來叢林に隨分其例も乏しくないが、十二回に及んだとは實に驚くべきである。卽ち門を閉ぢ

る人もよく閉ぢたもの、又これに懲りずして參ぜし人もよく參じたもの、いづれも尋常の人でなかつたことが思ひやらるゝでないか、眞に尋常の人でなかつた。

十二回まで參じて尙謁見を許されず、例の門前拂ひをくらつた石屋、卽ち眞梁はこゝに何と考へしか、普通の人であつたなら大に立腹して其處を去るべきである然るに石屋はさうでなかつた。彼は此に於てこれ我が志の尙淺きが致す所なりと考へた彼はこの考を懷きて「我若し和尙に救はれずば此の處に於て身命を捨つべし」と自ら決心した。乃ち晡時より明旦に至る迄、獨門外に直立して其處を去らなかつたのである。此の意氣に感ぜし通幻禪師心窃に憐愍の情に堪へずして遂に謁見を許し、弟子の分に加へ董陶怠りなく、石屋また所謂螢雪の勞を勞となさず、之を勉め、遂に通幻門下人多き中に於て一方の了菴が東方に門戸を張つて曹洞宗を宣布すると相對し、自らは鄕里鹿兒島に歸りて玉龍山福昌寺を開き、これを根據地となして、西國各地に曹洞宗を弘布する大善知識となつたのである。

藤原藤房の發心

妙心寺第二世授翁和尙、諱は宗弼、その生家に就きては古來異論があつて一定し難いのである。しかし『正法山六祖傳』『本朝高僧傳』等によれば授翁和尙は嘗て後醍醐天皇に事へ奉りて無二の忠勤を盡し、且つ儒學者として當時英名を轟かしたる從一位藤原宣房の子、正二位藤原藤房なりといふことになつて居る。

卽ち藤房は元弘の變亂に當りて後醍醐天皇に事へ奉り、時の天皇が大和の笠置に落ちさせたまふといふ如き、國家空前の大難局に際し、常に天皇の側を離れず供奉し大いに臣下としての道を盡す所ありしも、已に北條氏の滅亡と同時に、天皇復位あつて世は一時建武の中興の春となるや、天皇の政務に倦みたまへるあり、時に藤原藤房忠節を抽んで、大いに諫奏し奉る所ありしと雖も、佞臣の道に橫るあつて、藤房の意志は到底貫徹すべき見込なく隨つて國家の前途大いに憂慮すべきものあるを看破し、一

日斷然として朝を去り、誰にも告ぐることなく、當時城北の巖倉にあつて修行しつゝありし不二大徳方秀妙陽の所に到つて落髪し、其の人の弟子となつた。時に年三十八。

天皇此の事を聞こし召して大に驚きたまひ、父の宣房をして呼び還さしめたまふ。宣房諸方を物色して遂に城北の巖倉に到れば、不二大徳曰はく「其人は今朝他に去れり而も我れ其の所在を知らず」と。宣房入つて視れば壁上に「棄恩入無爲眞實報恩者」の句、並に古人の一偈を書するものあるを見るのみ、是に於て宣房遂に其の還らざるを知り、敢て其の後を追はず、自ら車を返したとある。

既に授翁は嘗て朝廷出仕の時よりして、退朝の餘暇大燈國師に參じて弟子の禮を執り。大に得る所あつて宗弼といへる法號の如きも、已に大燈國師より貰つて居たのである。然のみならず、大燈國師末後に及び、花園上皇に奏し奉りて關山獨り我が骨髓を得たりと言へるを聞き、心に關山和尚を慕へること恰も大燈國師を慕ふが如くであつた。既にして關山の來つて妙心に住するや、早速往いて弟子の禮を執り、遂に關

山門下唯一人の弟子となつたのである。

さて此に於て授翁が關山門下唯一人の弟子となつたことを知らんとするには又前に立ち還り關山和尚の爲人度生の端的を語らねばならぬ。凡そ關山和尚の人に接する態度は到底常識を以て解すべからざるものがあつた。禪門の口調に或は惡辣といひ、毒手といひ、又は號命峻峭、壁立萬仞といふが如き語を以て形容するのは卽ちこの關山和尚の如き人の態度をいふのである。要するに關山和尚は唯嚴しい人であつたと謂はんよりも寧ろ調子はづれの人であつたといふのが至當であると思ふ。

例せば或時一人の僧の來り參ずるあるや、イキナリ之を罵倒した。卽ち「此の馬鹿坊主めが」といふやうな調子であつたと見えた。スルト其の僧諦みて「某今生死の大事を念頭に掛け來れり和尚何ぞかく怒つて我を呵するや」といふや、關山曰はく「我に於て生死無し」と便ち其の僧を打ち出だした。又或時江州永源寺寂室和尚の所にあつて修行しつゝある、一人の僧の尋ね來るあり、關山之を一見し「どうぢや平常坐禪

するや否や」と尋ね更に語を續けて「どんな風に坐禪するのか一つやつて見よ」といふので、其の僧は正直に壁に向つて坐禪をして見せた。すると又同じく「此の馬鹿奴が」といふ調子で例の喝雷棒雨、卽ち大に罵倒し忽ち叩き出して仕舞つた。

斯ういふ調子であるから大燈國師の滅後、國師の隨身の重なる弟子十六名といふものは、皆關山の門に歸投したのである。されど孰れも皆ものにならぬかつた。要するに關山の要辣な手段に逢ふて幸抱が出來なかつたのである。右十六名の中に於て一番の上首たりしは宗雅といふ人であつたが、其の宗雅でさへ打ち出さるゝこと二十五度に及んだと云ふから。其の餘は推して知るべきでないか。

然るに授翁和尙卽ち藤原藤房一人のみはかくの如き惡辣毒手、かくの如き號令峻峭の下にあつて辛抱し、遂に關山の法を嗣ぐことになられたのである。吾人は其の忍耐に驚かざるを得ぬのである。世に辛抱强いといふ人があるならこの授翁和尙こそ實に辛抱强い人であつたと謂はねばならぬ。授翁が大悟徹底して師の印可を受けし年月は不明であるが何れにしても四十二歲にして入門し、それより數十年の後のことであつたに相違ない、其の入滅は康曆二年三月にして、壽八十五歲であつた。

一休和尙の眞價

一、非凡の天才非凡の修養

今日、禪宗の僧侶中で最もよく世俗一般の人口に膾炙せるものは謂ふまでもなく一休和尙である。

但し世俗に一休和尙の名高いのは、眞の一休和尙として名高いのでなく、滑稽じみた一種の奇人として名高いのである。なるほど一休和尙は其の行履に於てこれを一種の奇人として見ればさう見ても然るべき點が無いでもない。されど一休和尙は決して尋常一樣の奇人でない、彼れは非凡の天才に又非凡の修養を重ねたる偉人であり、豪傑であり。眞の高僧である。上人として仰ぎ、明師として尊むべき人である。決して

平凡の人でなかつた事は誠に以て明かである。

今其傳を見るに、一休といふは號にして本名は宗純と稱し、傳に依れば後小松天皇の御子である。母は嘗て南朝に仕へ奉りし紳士某の女なりしが、後小松天皇に奉事し御愛幸を蒙つて娠むところありしが、揣らずも后宮の讒言によりて宮中を退き、民間に處して分娩することになつたのである。此の母の傳記は委しくする能はざれど、容易ならぬ賢女であつたといふこと丈は種々の方面に於て參考することが出來る。一休和尚は此の如き父と又此の如き母とを賴みて、應永五年に生れた。幼名を千菊丸と申したが實に彼れは世に稀なる天才を有つて生れたのである。

年甫めて六歳の春、京都安國寺の像外禪師に投じたのであるが、其の聰明絶倫なるには此の時已に、何人も驚かぬものはなかつた。十二にして清叟といふ人に就きて佛教を學び、慕喆といふ人に就きて詩文を習うたのであるが、彼が十三の時に作れる、

「長門春草」の詩は實に左の如くである。

秋荒長信美人吟、徑路無媒上苑陰、榮辱悲歡目前事、君恩淺處草方深。

又左の二十八字は十五の時の作として傳へらるゝ「春衣宿花」の詩である。

吟行客袖幾時情、開落百花天地清、枕上香風寐耶寤、一場春夢不分明。

又左の詩は十七の時に作れる「中秋無月」の吟詠である。

是無月只有名明、獨坐閑吟對鐵檠、天下詩人斷腸夕、雨聲一夜十年情。

これらの詩は漢詩の出來る者も又出來ぬ者も、一吟の下に其の情神に入るの感があつて、假令老成の人と雖も容易に得難き佳作である。然るに彼れ一休は少年の時よりして早已にこんな佳作を口吟する程の人物であつた。

されど一休は此の如き詩文の末藝を以て滿足すべき者でない。是に由つて十七歳の時より宗爲禪師とて最高德の聞えある名僧の門に入つたのである。卽ちこの宗爲といふは妙心寺派の開山關山和尚の轍を履み、敢て世の風潮に流れず、獨り小菴に閑居して清貧に甘んじ、唯精神修養、兀然端坐のみを事となせ

る稀有の高僧であつた。一休は此の人に侍して身を鍛へ、心を練ること實に五年間、然るに五年を過ぎし頃、宗爲和尚は病のため終に遷化した。一休は此に精神上の親を失つた譯である。其失意落膽他に喩へ方もなき狀態であつた。そこで一休は宗爲和尚の歿後今後の方針を定めんがため、卽ち第二の明師を求めんがため、或は京都清水の觀世音に祈願し、或は江州石山寺の觀音に祈誓し、終に一度は近江の湖水に身を投ぜんとまで苦辛するに至つた、處が其の結果遂に當時近江の湖畔、卽ち堅田の禪興菴に逸居せし華叟和尚の門を叩くことになつたのである。

二、華叟和尚が辛辣の手段

此の華叟和尚といふのは京都紫野の大德寺の開山大燈國師妙超の法孫にして、よく其の家風を守り、室內の嚴正なる、門庭の峻峭なる、所謂壁立萬仞にして尋常人は到底寄り付き難しとする程の高僧であつた。當時世上の弊風を見て之を慨し、自ら世上の名聞を厭ひ、堅田の湖畔に獨精神を修養して居た人である、其の人格の高きことは寧ろ前の宗爲和尚以上の人であつたと謂つてよい。

一休は志を決し、一日堅田に華叟和尚の門を訪ふた、然るに和尚は門を閉ぢて入れず、無情にも其の面會を拒んで、どうしても之を許さぬ。されど最初より非常の決心を以て來れる一休は一度の謝絕により、最初の一念を挫折するやうなことのあるべき筈はない。卽ち彼れ以爲らく往古、慧可和尚が達磨を嵩山の少林に拜したときも達磨は之を顧みなかつた、されど慧可和尚は毅然として雪中に立ち、遂に臂を斷つに至つたではないか。我今一度師に拒絕せらるとも何ぞ是によつて此の處を去るべけんや我が一大事卽ち精神上の大問題を決すべき人は天下廣しと雖も此の人を除きて他にあることなし、故に我れ死すとも此の處を去らじと、愈々其の決心を堅くして、夜は露に眠り草に臥し、或時は湖頭の漁舟に投じて一夜を過ごし、朝になればまた門前に來つて佇み、かくの如くして四五日を經過した。

華叟和尚偶々檀越の家に赴かんとして門を出で、一休が門前に匍匐して居るを見て

無情にも左右を顧みて曰はく、「前日の僧今猶此に在り、早く水をぶつかけて逐ひやつて仕舞へ」と云ひ殘して出て行つたが、後刻菴に歸つて見るに先きに水を被ぶせられた一休は今猶ほ屹として去らうともしないで居る。

時に之を横目に睨んだ華叟和尚は、卽ち外面鬼の如き態度を取れるも內心は眞の親よりも尙ほ厚き慈悲あつての事なれば遂に引見を許し、面談を試みしに果して尋常の器にあらず、是を以て爾來最も暖なる師弟の契りを結んだのである。時維れ應永二十二年にして一休二十二の年であつた。

三、奇言奇行の慈悲落草

暖かなる師弟の契りを結んだとはいふものゝ、もと關山和尚及び徹翁和尚の家風を承け來れる、華叟和尚のことなれば、其の嚴正なる眞に一歩も假借しないといふ風であつた。其の辛辣なる大抵の者は閉口して逃出す程であつた。然るに一休は少しも之を畏れず、又之を厭はず、孜々兀々として之を勤め、前後九年の星霜を華叟の座下にあつて送り、參究怠りなかつたのである。一休が世にも稀れなる貴き高僧となつたのはたゞ事ではない。彼が非凡の天才を有つて生れ、而もまた斯くの如き苦辛慘澹たるところを忍び來りし結果である。語を換へて之をいへば猛烈なる意志を以て修養に怠ることなかりし結果である。

一休和尚の悟後の遊戯三昧に至つては意表外の行動が多くあつた。人稱して奇行に富むと云へども、單なる奇言奇行ではない。眞に社會人心を道破せる慈悲落草、然らずんば大地名藍のみを望み、權勢富貴に阿ることのみを知つて、眞箇の佛法將に地を拂はんとする當時の佛敎を慨嘆し、身を以て範を示されたものである。故に滑稽場裡憂宗悲憤の血あり、瓢逸脫洒の間自ら與法提撕の涙があつた。世人今日に至るも一休和尚の眞價を認めず、其表面のみに依りて之を斷ぜんとするは自己の愚を吐露するが如きものである。大正の今日眞箇一人の一休の出現ありせば、敎界の弊風を打破する又難きことではあるまいと思ふ。

乾坤第一人の畫僧雪舟

一、其生誕と別號

禪は鎌倉時代に於て多く我國に輸入されたのであるが、同時に宋元の文明をも將來した。支那の思想は六朝時代に道教即ち南方思想が其勢力を加へ、其後漸次佛教の弘宣流布に依つて、兩者次第に接近したのであるが、唐を過ぎて宋に入るや、一代の氣運は心的方面の開拓に向つた。其後を禀け元代に至るや、繪畫の如きも其影響の然らしむる所であらう、形似外に超然として直ちに其精神を捕捉するに努むに至つた。禪は直指人心見性成佛を以て本來の面目とするもの、隨つて禪の將來と共に、此新氣運に勃興せる藝術の將來と云ふことになつて、當時多くの畫僧が輩出するに至つた雪舟も蓋し其一人として最も傑出せる畫僧である。

雪舟、俗姓は小田氏、備中赤濱の人である、本朝畫史には「今に至りて赤濱の田間に、雪舟產するところの地ありと云ふ」とあるが、確にこれぞと云ふ確かな屋敷跡はないらしい。本姓は藤原氏、名は等楊、雪舟は其號である。山縣孝孺（周南）の雪舟傳には「其の名を命ずるや蓋し亦楊補之の逃禪を慕ふのみ」とあるが果して如何であらう。

此他に備溪齊と云ふ別號があるが、備は備中の備で溪は奇勝を以て知られた豪溪でも取つたのであらう。又雲谷の別號は、書史には「歸朝後、周防山口の雲谷寺に居す故に雲谷と稱し、或は雲谷軒と號す」と云ひ、山縣の雪舟傳にも「歸りて周州山口に居り、室を天花山下に築きて雲谷菴と號す」とあるが、追悼集の季英說には「歸朝後紫陽の雲谷に道を取り云々」とある、紫陽は筑紫のことであるが、雲谷は一概に周防とは定め難い、又米元山主と號したとも云ふが、米元山雲谷寺と稱したからだとの說がある。しかし米元を以て山號としたには何か譯がありさうである。米元輝米元素父子を慕つて斯く稱したと云ふ說も强ち否定は出來まいと思はれる。

二、幼時師を驚かせたる天才

畫史に依ると、雪舟が十二三歳となつた頃、其父之を携へて其國の井山寶福寺の弟子とした。然るに雪舟の畫技はその天稟であつて、寺に在つても經卷を事とせぬ。師僧之を怒つて、一日雪舟を柱に縛つたが、其夕暮、師僧は之を憐み堂上に到りて其縛を解かんとするに、雪舟の膝下に鼠が居るのに驚いて、之を逐はんとしたるに鼠は更に動かぬ。異なりとして之を見るに之は雪舟が自ら流した涙で脚の拇指で堂の板に鼠を畫いたのであつた。流石の師僧も之にはほと〳〵感服してこれから後は再び畫くことを禁じなかつたとある。雪舟の此寺に在つたのは永享年間であるが何歳頃まで居たのか、それは不明である。其後京都に入つて相國寺の洪德禪師の弟子となり、又鎌倉に赴いて建長寺の玉隱英嶼に從つた。

雪舟が天稟の畫技は周文に師事して、著しく進境に向つた。周文は相國寺の都寺であつた。嘗て江州の永源寺に居たが寺は愛知川の上流にあるところから周文自ら越溪と號した。如拙に從つて畫を學び、出藍の譽がある。畫史に稱して「其の畫くところの淡釋山水人物花鳥は馬夏顏の法を用ひ、墨畫は牧玉の奥を極む」と云つてゐる。

其後周防に在つて、大內氏の客となつてゐたことは、竹居清事の西遊集に、寄楊知客並叙（楊知客とは雪舟のこと。楊は等楊の楊で、知客とは禪寺に於て賓客に接する役で雪舟が此役をつとめてゐたからである）の說に寬正六年也とあつて、今雅下畫榜に登るものは數人に過ぎず、里譚巷論兒童走卒もみな西周に楊知客あるを知る、と記し

京洛曾遊楊客邨、結茆此地要終生、喜君畫格出天下、兒童亦知雲谷名。

の一詩を載せてゐる。これで見ると、寬正六年頃には雪舟は周防に留錫してゐたのである。そのうちに大內氏の勘合船に乘つて渡唐することゝなつた。雪舟が畫技は是に至つて更に一進境を開いたのである。

三、天童山の第一座

雪舟が入唐の年代は普通に寬正六年とあるが、これは誤傳である、應仁元年を以て

入唐の年と定めねばならぬ。本朝畫史にも「寛正中、海船に乘じて大明に入る」と云ひ、山縣周南の雪舟傳にも「寛正六年海船に託して明國に遊ぶ」とある但し周南の傳には或は曰はく應仁元年とあるが、此方が正しい。それは明の大興隆位山純拙老人魯菴が雪舟に送つた詩がある。其詩の小序に「去歳より四明に遊ぶ」とあつて、大明成化戊子季夏と書いてある。成化戊子とは成化四年のことで我が應仁二年に當る。

足利時代に起つた新藝術の氣運は絶大の天才雪舟の力に依つて之を助成し、後年新藝術の勃興があつたのである。狩野派が起り、江戸時代の繪畫諸流が起つたのは、畢竟その結果に外ならない。雪舟は如雪周文を得て其進境を聞き、支那の山川風土前賢の遺墨に接して之を大成したのである。彼は生れながらの天才であると共に之を研究する事を怠らなかつた。又彼の禪に得たる修養は其氣品を高からしめた。

其の明に在るや、天童山に上り、其禪班の第一座に陞つた、彼が畫に四明天童第一座と署するは之が爲めである。了菴桂悟の記には「名山大川遊殆ど四方に遍し」と見え、英嶼の題漁樵齋には「大唐國裏之風烟其筆に潤色す」とありて、支那の名山大水彼に幾多の畫材を供給したものである。雪舟が支那にあつて北京禪部院の壁に畫いたと云ふことは、畫史にも周南の傳にもあるが、之は杏塢良心の天開圖畫樓記に錄したことが其根源であらう。

そこで雪舟は明に在つて誰に師事したかと云ふと、雪舟が其の弟子如水宗淵に與へた、破墨山水の上に添へた文章がある。曰く。

相陽の宗淵藏主余に從ひて畫を學ぶ事年あり、筆は已に典型あり、意を藝に遊び、勉勵最も深し。今春歸るを告げ、謂つて曰く、願くば翁の一圖を獲て以て我が家の蒐裘青氈となさんと欲す。數日來りて之を責む、余眼昏く心耄し製する所以を知らずと雖も、其志に感じ輙ち禿筆を拈り、淡墨を洒いて之に與へて曰く、余曾て大明國に入り、北大江を渉り、齊魯の郊を經て洛に至り、畫師を求む然りと雖も、揮染清拔の者稀なり、玆に張有聲並に李在二人時名を得たり相隨ひて沒色の旨を傳

へ、衆ねて破墨の法を取る、數年にして本邦に歸り熟ら吾が祖如雪周文兩翁の楷模一に前聖の作を承けて敢て增損せざるを知る、支倭の間を歷覽して、彌々兩翁心識の高妙を仰ぐものか、子の求に應じ、嘲を顧みずして焉を書す。

明應二卯仲春仲澣日

四明天童第一座老境七十六翁雪舟書

四、八十七歲遷化まで

明に在つて雪舟が師事したと云ふ「張有聲」のことは明かでないが、李在のことは佩文齋書畫譜、無聲詩史、畫史彙傳、明畫錄等にある。之に依ると李在字は以玫、蒲田の人、雲南に遷り山水に精工であつた。細潤のものは郭熙を宗とし、豪放のものは夏珪馬遠を宗とし、多く古人を擧做し筆氣生動を善くし四方其尺牘を貴ぶ、宣宗の時戴文進より以下一人のみ夏禹開山治水圖ありて世に傳ふとある。しかし雪舟も云つて居る如く、支那に遊び愈々如拙周文の高さを知つたので、張李からは沒色破墨の法だけを傳承したのである。

雪舟の明に在るや、我國の富士、三保、清見の三絕景を畫いた當時明國の鴻儒詹仲和之に詩を題して、

巨嶂稜層鎭海涯、抹桑堪作上天梯、岩寒六月常留雪、勢似青蓮直遇氏、
名利雲連清建古、虛堂塵遠考禪栖、乘風合欲東遊去、特到松原竊羽衣、

と稱してゐる。

歸朝後雪舟が先づ豐後に居を占めたることは、僧良心の天開圖畫樓記に「楊々雪舟勝地を豐府西北の隅に相し一小樓を作し、榜に題して天開圖畫と曰ふ」とあるにて明かである。此記は文明八年の作であるから、其頃は此に留つたのであるが梅花無盡藏に「歸棹を皷し、小茅を筑紫域に結び、輿に乘じて諸州を遊戲し、行履滯るなく風塵表の質あり」とあるが如く、到る處を巡錫したことゝ思はれる。其後周防の山口に遷つたことは了菴桂悟の天開圖畫樓記に「爾後防域の郡府に來り、地を卜して新に之を

築く、之を望むに村鴉の如く然り碧の幽邃、流泉の榮蹕歩を廻すの城市とあい霄壤す、亦天開圖畫を以て小閣の北牖に顔す」とあるにて知れる、此記文の年代は不明であるが、文中に雲谷の齒古稀に垂んとす、とあれば雪舟が七十歳に近い頃、此地に居を占めてゐたのである。

永正三年八月八日、八十七歳の高齢を以て遷化せられた。

伊達政宗と法身禪師

一、波瀾に富める其生涯

伊達政宗は輝宗の子である、輝宗は伊達信夫の兩郡（今の陸前）を領して勢力を張つたが、天正十三年二本松氏と戰つた時、二本松氏に欺かれて殺された。其の時政宗は十八歳で米澤城に居つたが、直に走せ歸つて二本松義繼を討ち父の仇を復して、伊達家を續ぎ、田村、石川、白川の諸氏を平げて其の所領を合せ、常陸の佐竹氏を驅逐し、葦名氏を攻めて會津猪苗代の一圓を取り、相馬氏を破り磐城氏を平げ、奥州一圓を平定して慶長七年には岩手澤城即ち今の仙台城を築いて居城とし、其の名聲は關東關西に迄響いたのであつた。

秀吉が織長の覇業を繼いで大阪城を築いた頃は、秀吉に對しての强敵は九州の島津義久、四國の長曾我部元親、駿遠參甲信の五國を領した德川家康、關東の北條氏政、奥州の伊達政宗であつた。秀吉は先づ四國を平げ家康を互讓的に幕下に加へ、九州を一統し、天正十八年には小田原城を圍んで北條氏を降したので、伊達政宗は最後に秀吉に降つたのである。

政宗は十八歳で父輝宗の後を繼いでから七十歳にして死ぬ迄、大小幾多の戰爭に東奔西走したが、頗る孝心の深い武將であつた。秀吉の戰に家康との對陣の時を除いて多くの場合敗軍は無つたやうに、政宗も何の戰にも引けを取つた事のない智勇を兼ねた良將であつた。而て秀吉が親思いで小田原對陣中でも又は名古屋出陣先からも幾度

か書面を送つて母を慰めた如く、政宗も亦朝鮮出征中などは山海萬里の遠きを顧みず特に使を出して手紙を持たせ、品物などを贈つて居る。智略や剛勇が優れて居るばかりでなく、かゝる涙ある溫かい裏面があるから始めて眞の良將と云ふことが出來るのである。

政宗は寛永十三年五月二十四日に逝くなつた。彼が天正十三年父の後を繼いでから三十一年、彼の一生の中には信長の本能寺の變をも聞き、秀吉の朝鮮征伐にも加り、徳川氏が幕府を開いて天下が全く平和になつてから家康、秀忠、家光の三代の治を見て居る。戰國時代の英雄としては最も長生をした。而して變化と波瀾に富みながら比較的安靜な悠々たる日月を送つた幸運兒であつた。彼の臨終の日には豫て殉死を約したりした部下等を枕頭に呼び集めて酒など與へ、

曇りなき心の月を先きだてて
うき世の闇をてらしてぞゆく

の辭世一首を殘して悠然として逝いた。一生の間、如何に彼が戰塵の間に立つて居る時でも此の悠々たる態度を何處にか失はずに持つて居つたやうである。然し政宗の性來は負け嫌な短氣な人間であつた。そのかくの如きに至る迄には相當の精神的修養を要して居ることを忘れてはならぬ。

二、政宗と法身禪師

古來政宗と法身禪師との小說のやうな關係を傳へて居る、法身禪師は常陸の眞壁郡眞壁村の生れて本の名を平四郎と云つて政宗に仕へて草履取りとなつて居つた。眞壁の生れである所から眞壁の平四郎と云はれて居つたが、ある冬の寒い日政宗について崖氏へ行つたが、主人政宗の所用の間、忠義な平四郎は玄關先で、主人の草履の冷えぬ樣懷へ入れて溫めて居て政宗が出て來た時、ソッと草履を懷から出して揃へて置いた。すると政宗が其の草履を引つ懸けて、フト其の生溫かいのに氣がつくと、短氣な政宗はカッと怒つて「平四郎、貴樣は下郎の身分として主人の下駄に腰打掛けて居

つたな、不埒者めッ」といきなり下駄を取つて平四郎の面部を見がけてハッシと打つた。平四郎は身をかわす暇もなく、眉間からはトク〳〵と血が滴つた。

平四郎は滴る血潮を拭ひもせず、無念の涙にくれた、「主人が御癇症で、足袋が嫌ひ故、定めて御足が冷たからうと思つて下駄を暖めた、主人を思へばこそ泥のついた下駄を懐へ入れる、それにも係らずロク〳〵理由を質しもせず、所もあらうに如何に下郎とは云へ、男一匹の眉間を割るとは、己れ政宗見て居ろ」と怨骨髄に徹して瓢然政宗の下から姿を隠してしまつた。

其の後の平四郎は叡山へ上つて一心に修養して、後には時の天皇の歸依を得、法身禪師と稱して、京都東山の雲居寺に住し、雲居を通稱とした。後又支那へ渡り幾多の名僧知識に參見し、徑山に登つて苦修辨道、歸朝してから其の名聲は愈々上つたので終には勅命を受けて松島の瑞巌寺の復興を計ることとなつた。禪師が昔の平四郎であらうとは知らぬ、政宗は、禪師を迎へて城内に引入れた。禪師はそれに對して心よく承諾して唐の徑山寺に模して設計し、大に宗風を鼓揚せられた、それから政宗は暇さへあれば法身禪師に參じたが、禪師が平四郎以來始めて政宗に遭つた時

遠登徑山分風月、法身覺了無一物、到得歸來無別事、元是眞壁平四郎。

なる一頌を賦して政宗に示したので、政宗は初めてそれと心付き、篤く陳謝したと云ふことである。又一説には禪師が政宗と仙臺城内に相見えし時、豫て木履の片方を奉書包にして進物にしたとも傳へられて居る。

三、晩年の自適

其の他政宗は多くの禪僧と往來して詩文を交はして居る、文祿二年五月九日朝鮮出征中、遙々書を覺範寺の虎哉和尚に贈つて、其の年正月初めの、有名な蔚山の戰五月蔚山再度の戰の事などを知らせ、其の終りには一絶を賦して居る。

可知今歳掉滄海、　高麗大明屬掌中、
歸帆須是待秋風。　函劍囊弓治國處、

寛永六年二月初卯自分が少壯時代に着して以て千軍萬馬の間を馳驅した甲冑や、多くの武器を飾つて軍神を祭つた。その時多くの家來を招いて祝宴を開いた席上

四十年前少壯時、　功名聊復自私期、　老來不識干戈事、
只把春風桃李扈。

と云ひ、又

馬上少年過、　世平白髪多、　殘驢天所赦、　不樂是如何。

と云つて居る。これは彼の長逝する數年前のことであるが、百千兵馬の戰塵の間に送つた幾星霜を回顧み、今や天下は德川の一統する所となり萬民太平を謳歌するを思ふての作であらうが、獨り天下の太平なるのみならず政宗自身の心境も亦全く風波を絶して、悠々自適の境に達して居つたやうである。而してそれは法身禪師に依つて得たる修禪の功德であらねばならぬ。

石水和尚に訓練されし伊達安藝

一、伊達安藝の赤心

伊達安藝守宗重は奥州の鎭守府將軍であつた藤原秀衡の末で、祖先は亘理地方に住んで居たので亘理氏と云つて居たが、伊達政宗の父輝宗の時に伊達家に從つて植宗の十二男元宗を養子にしたので、子孫は伊達の姓を稱へるやうになつたのである。宗重は元宗の曾孫で、今の陸前の遠田郡涌谷の封地二萬石を領して、家柄が名門である關係上、而して又安藝が剛直な性格であつた爲め、本藩の一部からは尊敬されて居つたが一部からは恐れられても居つたのである。

伊達の本藩の綱宗は頗る遊蕩を極めたので、萬治元年に隱居させられて、二歳の龜千代が家督を繼ぎ、伊達兵部小輔宗勝と田村右京亮宗良が後見になつたが、伊達藩を攪亂せんとする野心ある兵部等と、剛直な忠義一片の安藝との意見が合ふ道理はない

兵部は常々如何にもして安藝の勢力を失墜せしめやうとし、安藝の方でも私かに兵部の行動を監視して、萬一の場合には容赦せぬ覺悟があつた。

此の反目は遂に地の境界論から破裂した、それは伊達安藝と其の隣邑なる伊達宗倫との領地の境界論であつたが、それに對して兵部は得たり幸ひとして、宗倫の肩を持つて頗る不公平な裁決を與へた、そこで愈々安藝は幼主を擁して藩内を擾す奸賊許し難しと憤慨して、公儀へ訴へて兵部一派を除かうとした。後見の要職に立つて政權を自由にせる兵部を排するには、それより仕方がなかつたのである。

二、安藝と石水和尚

安藝が斯くの如く一身を犧牲にしても、公儀へ訴へて主家の廓清をはからうと決心するに至らしめた背後には多年の禪的修養があつたことを見逃してはならぬ。安藝は菩提寺なる涌谷の圓洞寺の石水和尚に就いて常に工夫を重ねて居つた。石水和尚は政宗の參じた松島の瑞巖寺の雲居和尚の法孫で、學識德望共に高い人で、且つ機鋒の頗る峻烈な和尚であつたが、常に安藝を指導し、安藝が最後の決心をする場合にも背後には石水和尚の力が餘程あつたのである。

安藝が最後の手段に出るまでには、彼は如何にもして穩便に事を運び、兵部を悔悟させ、その秕政を改めさせやうとしたが、彼の苦心が遂に效なきに到つて、寛文十年十一月十八日に兵部の惡政を指摘列擧して、先づ仙臺の本藩の目付まで、其の旨を通じた。すると目付は非常に狼狽し、「お家の安危に係ることだから」と百方策を講じて安藝を慰撫し、内密に揉み消してしまはうとしたが、安藝は「お家を盤石の安きに置くには奸臣を除いて根本的に改造せねばならぬ」と云つて、遂に屈服しなかつた、其の頃の動靜や決意を自分の家來に申し送つた手紙の中に、

「書中披見せしめ候。仍て御目付衆御報拜見、いよ〳〵安く大慶に候。何と仰せ遣さるべきやと事の外苦勞に候處、此の上は心安く天道次第と安堵に候(中略)且又石水へ、能々其の方より其の方の樣子共、申のぼせ申すべく候」